Oracle9*i* Lite for Java

開発者ガイド

リリース 5.0.2

2002 年 12 月

部品番号 : J07027-01

ORACLE®

Oracle9*i* Lite for Java 開発者ガイド , リリース 5.0.2

部品番号：J07027-01

原本名：Oracle9*i* Lite Developer's Guide for Java, Release 5.0.2

原本部品番号：B10108-01

目次

C サンプル・プログラム

索引

表目次

はじめに

ここでは、『Oracle9*i* Lite for Java 開発者ガイド』の概要を紹介します。説明する内容は、次のとおりです。

このマニュアルについて

『Oracle9*i* Lite for Java 開発者ガイド』では、Oracle Lite の Java 機能を説明します。このマニュアルを使用するには、Java プログラミング言語の知識が必要となります。

『Oracle9*i* Lite for Java 開発者ガイド』の構成は、次のとおりです。

第 1 章「Oracle Lite の Java サポート」	Oracle Lite の Java 機能を紹介し、開発環境の設定方法について説明します。
第 2 章「Java ストアド・プロシージャとトリガー」	Oracle Lite での Java ストアド・プロシージャとトリガーの開発方法を説明します。
第 3 章「Java Database Connectivity (JDBC)」	Oracle Lite での JDBC サポートを説明します。
付録 A「ストアド・プロシージャのチュートリアル」	ストアド・プロシージャの作成と実行に関するチュートリアルを提供します。
付録 B「JDBC 2.0 の新機能」	Oracle Lite データベースにアクセスする JDBC プログラムの作成に関するチュートリアルを提供します。
付録 C「サンプル・プログラム」	Oracle Lite に同梱の Java のサンプル・プログラムについて説明します。

注意： このマニュアルにおいて、「Oracle8*i*」および「Oracle8*i* Server」という記述は、Oracle8*i* のリリース 8.1.5 以上を意味します。

表記法規約

このマニュアルでの表記法規約は次のとおりです。

イタリック	イタリックは変数を表します。変数には適切な値を代入します。
...	コードの一部で使用される省略記号は、その説明内容に関係のないコードを省略していることを意味します。
[ ]	SQL 文では、オプション項目は大カッコで囲まれます。たとえば、[a | b] は、a と b がどちらもオプションの引数であることを表します。カッコは入力しないでください。
{ }	中カッコで囲まれている項目は、いずれか 1 つを選択します。たとえば、{a|b} は、a か b の（両方ではなく）どちらかを選択する必要があることを表します。

|	垂直バーは、2 つのオプションがある場合に「または」を意味します。入力するオプションは 1 つのみです。垂直バー自体は入力しないでください。
英大文字	テキスト内の英大文字は、SELECT や UPDATE などの SQL キーワードを表します。

1

Oracle Lite の Java サポート

この章では、Oracle Lite でサポートされている Java インタフェースとツールを紹介します。説明する内容は、次のとおりです。

1.1 Java データ型

Oracle Lite は、次の表に示すように Java と Oracle との間でデータ型を変換します。表 1-1 に、型変換の結果作成された Java データ型と対応する SQL データ型を示します。

表 1-1 データ型の変換

Java データ型	SQL データ型
byte[]、byte[][]、Byte[]	BINARY、RAW、VARBINARY
boolean、Boolean	BIT
String、String[]	CHAR、VARCHAR、VARCHAR2
short、short[]、short[][]、Short、Short[]	SMALLINT
int、int[]、int[][]、Integer、Integer[]	INT
float、float[]、float[][]、Float、Float[]	REAL
double、double[]、double[][]、Double、Double[]	DOUBLE、NUMBER（精度の指定なし）
BigDecimal、BigDecimal[]	NUMBER(n)
java.sql.Date、java.sql.Date[]	DATE
java.sql.Time、java.sql.Time[]	TIME
java.sql.Timestamp、java.sql.Timestamp[]	TIMESTAMP
java.sql.Connection	データベースへのデフォルトの JDBC 接続

1.2 Java ツール

Oracle Lite は、Java 開発を管理するツールを提供します。表 1-2 に、これらの Java ツールとその説明を示します。

表 1-2 Java ツール

ツール	説明
`loadjava`	Java クラスを Oracle Lite にロードします。
`dropjava`	Java クラスを Oracle Lite から削除します。

1.2.1 loadjava

`loadjava` ユーティリティは、Java クラスとリソースを Oracle Lite データベースにロードする作業を自動化します。`loadjava` を使用すると、クラスおよびリソースを個別に、あるいは ZIP または JAR アーカイブとしてロードできます。

クラスをロードした後、SQL 文からアクセスするクラスのメソッドのコール仕様を作成します。値を返すストアド・プロシージャのコール仕様を作成するには、SQL の CREATE FUNCTION 文を使用します。ストアド・プロシージャが値を返す必要がない場合は、CREATE PROCEDURE 文を使用します。

クラスのアンロード用として、Oracle Lite では `dropjava` を提供していますが、これは `loadjava` と同様に機能します。

1.3 Oracle Lite が提供する Java 開発環境

Oracle Lite における Java 開発は、次のツールにより促進されます。

- Oracle Developer 2.1 は、Oracle Lite でのユーザー定義 Java ストアド・プロシージャをサポートしています。
- Oracle JDeveloper は、Oracle Lite での Java ストアド・プロシージャをサポートし、Java ストアド・プロシージャの開発と配置を支援するように設計された機能を装備しています。

1.3.1 環境の設定

この項では、Oracle Lite アプリケーションを作成する開発環境の設定方法を説明します。Java アプリケーションを開発するには、Sun 社の Java Development Kit（JDK）バージョン 1.3.1（以上）が必要です。

Oracle Lite のインストール後、Oracle Lite が JDK とともに稼働できるように、環境変数 PATH および CLASSPATH を設定します。PATH および CLASSPATH の設定は、次の項で説明されているように、使用する JDK のバージョンにより異なります。

Oracle Lite をインストールする前に環境変数に CLASSPATH ユーザー変数が含まれており、このユーザー変数に CLASSPATH システム変数が含まれていない（CLASSPATH=...;%CLASSPATH% として指定されていない）場合、CLASSPATH ユーザー変数を変更して *Oracle_Home*¥MOBILE¥CLASSES ディレクトリ内の **OLITE40.JAR** ファイルを組み込んでください。

> **注意：** CLASSPATH に対する変更を反映するには、すべてのコマンド・プロンプト・ウィンドウを閉じてから再度オープンする必要があります。

1.3.1.1 JDK 1.3.1 の場合の変数の設定

JDK 1.3.1 を使用する場合は、JDK 1.3.1 Java コンパイラ（**javac.exe**）が含まれたディレクトリを、他の Java コンパイラを含むディレクトリよりも前に PATH 変数内に指定する必要があります。

Classic Java VM の共有ライブラリ（**jvm.dll**）を含むディレクトリを PATH に追加します。**jvm.dll** は、JDK_Home¥jre¥bin¥classic ディレクトリにあります。

oljdk11.jar を CLASSPATH から削除します。これにより、Oracle Lite で使用されるシステム・クラスのバージョンが、JDK で使用されるバージョンと同じになります。例を次に示します。

```
set PATH=c:¥JDK_Home¥bin;c:¥JDK_Home¥jre¥bin¥classic
set CLASSPATH=c:¥JDK_Home¥jrc¥lib¥rt.jar;c:¥Oracle_Home¥Mobile¥classes¥olite40.jar
```

Classic Java VM を使用するかわりに、HotSpot Java VM を使用することもできます。HotSpot は、Sun 社により提供されている JDK アドオン・モジュールです。HotSpot は Sun 社の Web サイトから入手できます。

HotSpot をインストールした後、次のように PATH を設定します。

```
set PATH=c:¥jdk1.3.1¥bin;c:¥jdk1.3.1¥jre¥bin¥hotspot;%PATH%
```

この例では、JDK および HotSpot はドライブ C にインストールされます。PATH 文を設定する前にインストール場所を確認する必要があります。システムが正常に設定されたかどうかを調べるには、*Oracle_Home*¥Mobile¥sdk¥Examples¥Java ディレクトリにある Java のサンプルを実行します。

2

Java ストアド・プロシージャとトリガー

この章では、Oracle Lite リレーショナル・モデル内で Java ストアド・プロシージャとトリガーを使用する方法を説明します。説明する内容は、次のとおりです。

2.1 Oracle Lite の新機能

Oracle Lite では、Oracle データベース・サーバーのストアド・プロシージャ開発モデルをサポートするようになりました。このモデル（ロード・パブリッシュ開発モデル）では、クラスを表にアタッチするかわりに、`loadjava` コマンドライン・ユーティリティまたは SQL 文の `CREATE JAVA` を使用して、Java クラスを Oracle Lite データベースにロードします。クラスをデータベースにロードした後、コール仕様を使用して、SQL からコールするクラスのメソッドをパブリッシュします。コール仕様を作成するには、CREATE FUNCTION または CREATE PROCEDURE コマンドを使用します。詳細は、「モデル 1: ロード・パブリッシュ・ストアド・プロシージャ開発モデルの使用」を参照してください。

Oracle Lite では、ストアド・プロシージャの作成にあたり従来のモデルもサポートしています。従来のモデルでは、Java クラスを表にアタッチします。クラス内の静的メソッドがその表の表レベルのストアド・プロシージャになり、非静的（インスタンス）メソッドが、行レベルのストアド・プロシージャになります。

Oracle Lite には、今回、Java クラスをデータベースにロードする作業を自動化する `loadjava` ユーティリティが含まれています。`loadjava` を使用すると、Java クラス、ソースおよびリソースを個別にまたはアーカイブとしてロードできます。詳細は、「loadjava」を参照してください。

2.2 Java ストアド・プロシージャとトリガーの概要

Java ストアド・プロシージャは、Oracle Lite データベースに格納される Java メソッドです。このプロシージャは、データベースにアクセスするアプリケーションにより起動できます。トリガーは、行の更新、挿入または削除などの特定のイベントが発生したときに実行（起動）されるストアド・プロシージャです。列を更新した場合も、トリガーを起動できます。

トリガーは、文レベルまたは行レベルで操作できます。文レベルのトリガーは、複数の行が影響されても、トリガー文につき 1 回起動されます。行レベルのトリガーは、トリガー文により影響される行につき 1 回起動されます。Java ストアド・プロシージャは、1 つの値、1 行または複数行を返しますが、トリガーは値を返しません。

ストアド・プロシージャを作成するには、まず Oracle Lite に格納するクラスを作成します。Java IDE を使用してプロシージャを作成するか、既存のプロシージャが要件に合うものであれば、それを再利用できます。

クラスを作成するときは、SQL DML 文からの Java ストアド・プロシージャのコールに関する次の制限を考慮してください。

- INSERT 文、UPDATE 文または DELETE 文からコールされたメソッドは、その文により変更されたデータベース表に対して問合せまたは変更できません。
- SELECT 文、INSERT 文、UPDATE 文または DELETE 文からコールされたメソッドは、COMMIT などの SQL トランザクション制御文を実行できません。

ストアド・プロシージャ内に、前述の制限に違反する SQL 文があると、実行時に（その文が解析されるときに）エラーが生成されます

1 つの Oracle Lite アプリケーションには Java Virtual Machine（JVM）が 1 つしかロードされないため、クラスには配置環境において一意の名前を付ける必要があります。アプリケーションが複数のデータベースからメソッドをコールする場合、それぞれのデータベースの Java クラスは同じ JVM にロードされます。Java クラス名にデータベース名を接頭辞として付けると、複数のデータベースにわたって Java クラス名を一意にできます。

Java ストアド・プロシージャが `java.sql.Connection` 型の引数を取る場合、Oracle Lite はカレント・トランザクションまたはカレント行から適切な値を最初の引数としてメソッドに渡します。このメソッドをコールするアプリケーション側でこのパラメータに値を指定する必要はありません。

2.3 ストアド・プロシージャの使用方法

Oracle Lite は、ストアド・プロシージャを作成する開発モデルをいくつかサポートします。ロード・パブリッシュ・モデルでは、Java クラスを Oracle Lite にロードし、次に、SQL からコールするクラスの静的メソッド用にコール仕様を作成します。このモデルは、Oracle データベースでもサポートされています。このため、Oracle データベースの企業向けアプリケーションの実装で培ったスキルとリソースを利用できます。

このモデルでは、次の手順を使用します。

1. 格納するメソッドを含む Java クラスを開発します。
2. `loadjava` ユーティリティまたは SQL の CREATE JAVA コマンドを使用して、クラスを Oracle Lite データベースにロードします。
3. SQL からアクセスするメソッドを、コール仕様を作成してパブリッシュします。メソッドのパブリッシュにより、SQL 名がメソッドに関連付けられます。SQL アプリケーションではこの名前を使用してメソッドをコールします。

Oracle Lite に格納してあるプロシージャをすべてパブリッシュする必要はありません。SQL からコールするプロシージャのみをパブリッシュします。他のストアド・プロシージャからコールされるだけのストアド・プロシージャも多数あり、これらをパブリッシュする必要はありません。このモデルを使用してストアド・プロシージャを開発する方法の詳細は、「モデル 1: ロード・パブリッシュ・ストアド・プロシージャ開発モデルの使用」を参照してください。ロード・パブリッシュ・モデルでサポートされているのは静的メソッドのみです。

次のモデルでは、クラスを表にアタッチし、クラス内のメソッドを名前によりコールします。これは、ストアド・プロシージャを開発する従来の Oracle Lite モデルです。このモデルを使用すると、クラス・レベルの（静的）メソッドとオブジェクト・レベルの（非静的）メソッドの両方を格納できます。

このモデルでは、次の手順に従います。

1. 格納するメソッドを含む Java クラスを開発します。
2. SQL の ALTER TABLE コマンドを使用して、クラスを表にアタッチします。

クラスをアタッチした後は、クラス内のメソッドを SQL から直接コールできます。メソッドは次の構文で指定します。

```
table_name.method_name
```

Java クラスを表にアタッチする方法は、「モデル 2: アタッチ済ストアド・プロシージャ開発モデルの使用」を参照してください。

Oracle Lite は、ストアド・プロシージャを削除するためのツールと SQL コマンドを提供しています。Oracle Lite ではクラス間の依存性を追跡しないため、データベースからプロシージャを削除するときは注意が必要です。削除するストアド・プロシージャが、他のストアド・プロシージャで参照されていないことを確認する必要があります。クラスを削除すると、直接的または間接的にそのクラスに依存するクラスが無効になります。

2.3.1 モデル 1: ロード・パブリッシュ・ストアド・プロシージャ開発モデルの使用

この項では、ロード・パブリッシュ開発モデルを使用してストアド・プロシージャを作成する方法を説明します。ストアド・プロシージャを作成するには、まずクラスを作成します。クラスがエラーなしでコンパイルされ実行されることを確認します。次に、クラスを Oracle Lite データベースにロードします。最後に、SQL からコールするメソッドをパブリッシュします。Oracle Lite では、`main` メソッドにマップされるメソッドはパブリッシュできません。一方、Oracle データベースでは、`main` メソッドをパブリッシュするコール仕様を作成できます。

注意： ロード・パブリッシュ開発モデルでサポートされているのは Java 静的メソッドのみです。静的メソッドと非静的（インスタンス）メソッドの両方を格納するには、「モデル 2: アタッチ済ストアド・プロシージャ開発モデルの使用」で説明されているように、データベース表にクラスをアタッチする必要があります。

2.3.1.1 クラスのロード

Java クラスを Oracle Lite データベースにロードするには、次のいずれかを使用できます。

- `loadjava`
- SQL 文の `CREATE JAVA`

`loadjava` コマンドライン・ユーティリティは、Java クラスを Oracle Lite および Oracle データベースにロードする作業を自動化します。Java クラスを手動でロードするには、SQL 文の `CREATE JAVA` を使用します。

2.3.1.1.1 loadjava loadjava によりファイルからスキーマ・オブジェクトが作成され、そのオブジェクトがスキーマにロードされます。スキーマ・オブジェクトは、Java ソース、クラスおよびリソースから作成できます。リソースとしては、イメージ、リソース、またはその他

プロシージャがデータとしてアクセスする必要のあるものであれば、何でもかまいません。ファイルは、個別に、または ZIP や JAR アーカイブ・ファイルとして loadjava に渡すことができます。

Oracle Lite ではクラスの依存性を追跡しません。ストアド・プロシージャが必要とするクラスとリソースが、すべてデータベースにロードされているか CLASSPATH に指定されていることを確認してください。

構文

loadjava の構文は、次のとおりです。

```
loadjava {-user | -u} username/password[@database]
   [-option_name -option_name ...] filename filename ...
```

引数

次に、loadjava の引数について詳しく説明します。

user

user 引数には、ユーザー名、パスワードおよびデータベース・ディレクトリを次の書式で指定します。

```
<user>/<password>[@<database>]
```

例を次に示します。

```
scott/tiger@c:¥ORANT¥OLDB40¥Polite.odb
```

オプション

Oracle Lite は、表 2-1 で説明されている 2 つのオプションをサポートします。

表 2-1 オプション

オプション	説明
-force | -f	ファイルのロードを施行します。すでにデータベースに同じ名前のスキーマ・オブジェクトが存在する場合でも施行されます。
-verbose | -v	実行中に詳細なステータス・メッセージを表示するように、loadjava に指示します。

複数のオプションを指定する場合は、オプション間をスペースで区切る必要があります。例を次に示します。

```
-force -verbose
```

Oracle データベースは、『Oracle9*i* Java ストアド・プロシージャ開発者ガイド』で説明されているように、その他のオプションもサポートします。その他のオプションが Oracle Lite

で使用された場合、認識はされますがサポートはされません。このようなオプションを使用しても、エラーにはなりません。

Oracle データベースでサポートされているオプションを表示するには、次の構文で loadjava のヘルプ情報を参照してください。

```
loadjava {-help | -h}
```

filename

コマンドラインには、クラス、ソース、JAR、ZIP およびリソースを任意の順序でいくつでも指定できます。複数のファイル名を指定する場合は、カンマではなくスペースで区切る必要があります。ソースが渡されると、loadjava は Java コンパイラを起動して、ファイルをデータベースにロードする前にコンパイルします。JAR ファイルまたは ZIP ファイルが渡されると、loadjava は JAR または ZIP 内の各ファイルを処理します。JAR または ZIP アーカイブの場合はスキーマ・オブジェクトは作成されません。loadjava は、JAR または ZIP アーカイブ内にある JAR または ZIP アーカイブは処理しません。

ファイルをロードする最善の方法は、JAR または ZIP 内にファイルを入れ、そのアーカイブをロードすることです。アーカイブをロードすることにより、リソースのスキーマ・オブジェクトの複雑な名前体系に煩わされません。JDK で有効な JAR または ZIP がある場合は、この JAR または ZIP を loadjava でロードできるため、リソースのスキーマ・オブジェクトの複雑なネーミングに煩わされなくてすみます。

loadjava では、データベースにファイルをロードするときに、ファイル用に作成するスキーマ・オブジェクトに名前を付ける必要があります。スキーマ・オブジェクトの名前は、ファイル名とは少し違います。また、異なるスキーマ・オブジェクトには異なるネーミング規則があります。クラスは名前で識別できるため、loadjava は自動的にファイル名をスキーマ名にマップできます。同様に、JAR および ZIP にはその中にあるファイルの名前が含まれています。

しかし、リソースは名前では識別できないため、コマンドラインに入力されるリテラル名（または JAR や ZIP アーカイブ内のリテラル名）から Java リソースのスキーマ・オブジェクト名が導出されます。クラスの実行中にリソースのスキーマ・オブジェクトが使用されるため、コマンドラインには正しいリソース名を指定することが重要です。

リソースを個別にロードする最善の方法は、loadjava をパッケージ・ツリーの最上位のディレクトリから実行し、そのディレクトリを基準にした相対的なリソース名を指定することです。リソースのロードをパッケージ・ツリーの最上位から行わない場合は、リソースの命名に関する次の情報を考慮してください。

リソースをロードするとき、loadjava は、コマンドラインに入力されたファイル名からリソースのスキーマ・オブジェクトの名前を導出します。次のような相対パス名と絶対パス名をコマンドラインに入力したとします。

```
cd ¥scott¥javastuff
loadjava options alpha¥beta¥x.properties
loadjava options  ¥scott¥javastuff¥alpha¥beta¥x.properties
```

同一ファイルを相対パス名と絶対パス名で指定しましたが、loadjava は 2 つのスキーマ・オブジェクトを作成します。

- alpha¥beta¥x.properties
- ¥scott¥javastuff¥alpha¥beta¥x.properties

loadjava は、入力されたファイル名からリソースのスキーマ・オブジェクトの名前を生成します。

クラスからのリソースの参照は、相対的（たとえば、b.properties）または絶対的（たとえば、¥a¥b.properties）に指定できます。loadjava とクラス・ローダーでスキーマ・オブジェクトに必ず同じ名前が使用されるようにするには、クラスから java.lang.Object.getResource メソッドまたは java.lang.Class.*getResourceAsStream* メソッドに渡されるリソースの名前を loadjava に渡します。

コマンドラインに正しい名前を入力できるように、クラスがリソースの指定に使用している相対名または絶対名を覚えておいてディレクトリを変更するという作業のかわりに、次のように、リソースを JAR ファイルにロードできます。

```
cd ¥scott¥javastuff
jar -cf alpharesources.jar alpha¥*.properties
loadjava options alpharesources.jar
```

または、さらに簡単にクラスとリソースの両方を JAR に入れると、次の起動方法が同じになります。

```
loadjava options alpha.jar
loadjava options ¥scott¥javastuff¥alpha.jar
```

例

次の指定により、クラスとリソースが Oracle Lite データベースにロードされます。この指定では force オプションが使用されているため、指定された名前のオブジェクトがすでにデータベースにある場合は、loadjava により置き換えられます。

```
c:¥> loadjava -u scott/tiger@c:¥ORANT¥OLDB40¥Polite.odb -f Agent.class ¥
    images.dat
```

2.3.1.1.2 CREATE JAVA の使用方法

Java クラスを手動でロードするには、次の構文を使用します。

```
CREATE [OR REPLACE] [AND RESOLVE] [NOFORCE]
   JAVA {CLASS [SCHEMA <schema_name>] |
   RESOURCE NAMED [<schema_name>.]<primary_name>}
   [<invoker_rights_clause>]
   RESOLVER <resolver_spec>]
```

```
USING BFILE ('<dir_path>', '<class_name>')
```

CREATE JAVA のパラメータは、次のとおりです。

- OR REPLACE 句を指定すると、同じ名前のファンクションまたはプロシージャがデータベースにすでに存在する場合、再作成されます。
- Oracle データベースと互換性を保つために、Oracle Lite では <resolver_spec> 句は認識されますが処理は行いません。Oracle データベースとは異なり、Oracle Lite ではクラスの依存性は解決されません。クラスを手動でロードする場合は、必ず依存クラスをすべてロードするようにしてください。
- Oracle Lite では <invoker_rights_clause> が認識されますが、処理は行いません。

例

次に CREATE JAVA 文の例を示します。この例では、Employee というクラスがデータベースにロードされます。

```
CREATE JAVA CLASS USING BFILE ('c:¥myprojects¥java',
   'Employee.class');
```

2.3.1.2 SQL へのストアド・プロシージャのパブリッシュ

loadjava または CREATE JAVA を使用してクラスを Oracle Lite データベースにロードした後は、クラス内の静的メソッドで SQL からコールするメソッドをパブリッシュします。メソッドをパブリッシュするには、そのためのコール仕様を作成します。コール仕様は、Java メソッドの名前、パラメータ・タイプおよび戻り型を、対応する SQL 要素にマップします。

ストアド・プロシージャをすべてパブリッシュする必要はありません。アプリケーションのエントリ・ポイントとして機能するもののみをパブリッシュします。通常の実装では、ストアド・プロシージャのほとんどは SQL ユーザーではなく他のストアド・プロシージャからのみコールされます。

コール仕様を作成するには、SQL コマンドの CREATE FUNCTION または CREATE PROCEDURE を使用します。値を返すメソッドには CREATE FUNCTION を、値を返さないメソッドには CREATE PROCEDURE を使用します。CREATE FUNCTION 文と CREATE PROCEDURE 文の構文は次のとおりです。

```
CREATE [OR REPLACE]
   { PROCEDURE [<schema_name>.]<proc_name> [([<sql_parms>])] |
   FUNCTION [<schema_name>.]<func_name> [([<sql_parms>])]
   RETURN <sql_type> }
   <invoker_rights_clause>
   { IS | AS } LANGUAGE JAVA NAME
   '<java_fullname>  ([<java_parms>])
   [return <java_type_fullname>]';
   /
```

この文のキーワードとパラメータは次のとおりです。

- <sql_parms> は次の書式です。

```
<arg_name> [IN | OUT | IN OUT]
         <datatype>
```

- <java_parms> は、Java データ型の完全修飾名です。
- Oracle データベースとの互換性を保つために、Oracle Lite では <invoker_rights_clause> 句は認識されますが処理は行いません。
- <java_fullname> は、Java 静的メソッドの完全修飾名です。
- IS と AS は同義です。

たとえば、次のクラスがデータベースにロードされているとします。

```
import java.sql.*;
import java.io.*;

public class GenericDrop {
   public static void dropIt (Connection conn, String object_type,
                       String object_name) throws SQLException {
      // Build SQL statement
      String sql = "DROP " + object_type + " " + object_name;
      try {
         Statement stmt = conn.createStatement();
         stmt.executeUpdate(sql);
         stmt.close();
      } catch (SQLException e) {
         System.err.println(e.getMessage());}
   }  // dropIt
}  // GenericDrop
```

クラス GenericDrop には、dropIt という名前のメソッドが 1 つあり、このメソッドはどのような種類のスキーマ・オブジェクトでも削除します。たとえば、引数「table」と「emp」を dropIt に渡すと、データベース表 EMP をスキーマから削除します。

次のコール仕様により、このメソッドが SQL にパブリッシュされます。

```
CREATE OR REPLACE PROCEDURE drop_it (
      obj_type VARCHAR2,
      obj_name VARCHAR2)
   AS LANGUAGE JAVA
   NAME 'GenericDrop.dropIt(java.sql.Connection,
      java.lang.String, java.lang.String)';
   /
```

Java データ型パラメータには完全修飾名を指定する必要があるので、注意してください。

2.3.1.3 パブリッシュされたストアド・プロシージャのコール

ストアド・プロシージャを SQL にパブリッシュした後、SQL DML 文を使用してこのプロシージャをコールします。たとえば、次のクラスがデータベース内に格納されているとします。

```
public class Formatter {
   public static String formatEmp (String empName, String jobTitle) {
      empName = empName.substring(0,1).toUpperCase() +
         empName.substring(1).toLowerCase();
      jobTitle = jobTitle.toLowerCase();
      if (jobTitle.equals("analyst"))
         return (new String(empName + " is an exempt analyst"));
      else
      return (new String(empName + " is a non-exempt " + jobTitle));
  }
}
```

クラス Formatter には formatEmp というメソッドが 1 つあり、このメソッドは、従業員の名前と職務状態を含む書式化された文字列を返します。Formatter 用のコール仕様を次のように作成します。

```
CREATE OR REPLACE FUNCTION format_emp (ename VARCHAR2, job VARCHAR2)
   RETURN VARCHAR2
   AS LANGUAGE JAVA
   NAME 'Formatter.formatEmp (java.lang.String, java.lang.String)
   return java.lang.String';
   /
```

このコール仕様により、メソッド formatEmp が format_emp としてパブリッシュされます。これを次のようにコールします。

```
SELECT FORMAT_EMP(ENAME, JOB) AS "Employees" FROM EMP
   WHERE JOB NOT IN ('MANAGER', 'PRESIDENT') ORDER BY ENAME;
```

この文により、次の出力が生成されます。

```
Employees
-------------------------------------------
Adams is a non-exempt clerk
Allen is a non-exempt salesman
Ford is an exempt analyst
James is a non-exempt clerk
Martin is a non-exempt salesman
Miller is a non-exempt clerk
Scott is an exempt analyst
```

```
Smith is a non-exempt clerk
Turner is a non-exempt salesman
Ward is a non-exempt salesman
```

注意： Oracle Lite では、Oracle データベース SQL の CALL 文を使用してストアド・プロシージャを起動することはできません。

C および C++ アプリケーションからストアド・プロシージャをコールする方法は、「Java ストアド・プロシージャの ODBC からのコール」を参照してください。

2.3.1.4 パブリッシュされたストアド・プロシージャの削除

Oracle Lite からクラスを削除するには、次のいずれかを使用します。

- dropjava ユーティリティ
- SQL の DROP JAVA 文

コール仕様を削除するには、DROP FUNCTION または DROP PROCEDURE を使用します。

2.3.1.4.1 dropjava の使用 dropjava は、Oracle Lite および Oracle データベースから Java クラスを削除する作業を自動化するコマンドライン・ユーティリティです。dropjava は、ファイル名をスキーマ・オブジェクト名に変換し、そのスキーマ・オブジェクトを削除します。dropjava の起動には次の構文を使用します。

```
dropjava {-user | -u} username/password[@database]
  [-option] filename filename ...
```

引数

次に、dropjava の引数について説明します。

user

user 引数には、ユーザー名、パスワードおよびデータベース・ファイルの絶対パス名を次の書式で指定します。

```
<user>/<password>[@<database>]
```

例を次に示します。

scott/tiger@c:¥ORANT¥OLDB40¥Polite.odb

オプション

verbose オプション（-verbose | -v）を指定すると、実行中に詳しいステータス・メッセージを生成するように dropjava に指示できます。

Oracle データベースは、『Oracle9*i* Java ストアド・プロシージャ開発者ガイド』で説明されているように、dropjava のその他のオプションもサポートします。その他のオプションが Oracle Lite で使用された場合、認識はされますがサポートはされません。このようなオプションを使用しても、エラーにはなりません。

サポートされるオプションと認識されるオプションの一覧を表示するには、コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
dropjava -help
```

filename

filename 引数には、Java クラス、ソース、JAR、ZIP およびリソースを任意の順序でいくつでも指定できます。JAR および ZIP ファイルは圧縮を解凍する必要があります。dropjava では、ほとんどのファイル名を loadjava と同じ方法で解釈します。

- クラスを指定した場合、ファイル内でクラス名を検索し、それに対応するスキーマ・オブジェクトを削除します。
- ソースを指定した場合、ファイル内の最初のクラス名を検索し、それに対応するスキーマ・オブジェクトを削除します。
- JAR および ZIP ファイルを指定した場合、アーカイブされているファイルの名前がコマンドラインで入力されたかのように、ファイル名を処理します。

ファイル名に **.java**、**.class**、**.jar** または **.zip** 以外の拡張子がある場合、または拡張子がない場合は、ファイル名がスキーマ・オブジェクト名であると解釈され、その名前のソース、クラス、またはリソースのスキーマ・オブジェクトがすべて削除されます。スキーマ・オブジェクトのどの名前とも一致しないファイル名が検出されると、エラー・メッセージが表示され、残りのファイル名が処理されます。

2.3.1.4.2 SQL コマンドの使用方法 Oracle Lite データベースから Java クラスを手動で削除するには、DROP JAVA 文を使用します。DROP JAVA の構文は次のとおりです。

```
DROP JAVA { CLASS | RESOURCE } [<schema-name> .]<object_name>
```

コール仕様を削除するには、DROP FUNCTION 文または DROP PROCEDURE 文を使用します。

```
DROP { FUNCTION | PROCEDURE } [<schema-name>.]<object_name>
```

スキーマ名が指定された場合、Oracle Lite では認識されますがサポートはされません。

2.3.1.5 例

次の例では、ロード・パブリッシュ・モデルを使用して Java ストアド・プロシージャを作成します。

この例では、Java メソッド paySalary を Oracle Lite データベースに格納します。paySalary は、従業員の手取り給与を計算します。

この例には次の手順が含まれています。

- 手順 1: Java クラスの作成
- 手順 2: データベースへの Java クラスのロード
- 手順 3: ファンクションのパブリッシュ
- 手順 4: ファンクションの実行

Java ストアド・プロシージャの例は、他にも *Oracle_Home*¥Mobile¥SDK¥Examples¥Java ディレクトリにあります。

手順 1: Java クラスの作成

Employee.java ファイルに Java クラス `Employee` を作成します。`Employee` クラスは `paySalary` メソッドを実装します。

```
import java.sql.*;
public class Employee {
   public static String paySalary(float sal, float fica, float sttax,
                           float ss_pct, float espp_pct)  {
      float deduct_pct;
      float net_sal;
        // compute take-home salary
      deduct_pct = fica + sttax + ss_pct + espp_pct;
      net_sal = sal * deduct_pct;
      String returnstmt = "Net salary is " + net_sal;
      return returnstmt;
   } // paySalary
}
```

> **注意：** 最初の PUBLIC クラス文の前に、コメント内でキーワードの「public class」を使用しないでください。

手順 2: データベースへの Java クラスのロード

MSQL から、次のように CREATE JAVA を使用して Java クラスをロードします。

```
CREATE JAVA CLASS USING BFILE ('c:¥myprojects¥doc',
'Employee.class');
```

このコマンドは、c:¥myprojects¥doc にある Java クラスを Oracle Lite データベースにロードします。

手順 3: ファンクションのパブリッシュ

`paySalary` メソッド用のコール仕様を作成します。次のコール仕様は、Java メソッド `paySalary` をファンクション `pay_salary` としてパブリッシュします。

```
CREATE FUNCTION pay_salary (
```

```
sal float, fica float, sttax float, ss_pct float, espp_pct float)
RETURN VARCHAR2
AS LANGUAGE JAVA NAME
'Employee.paySalary(float, float, float, float, float)
return java.lang.String';
/
```

手順 4: ファンクションの実行

MSQL 内で pay_salary を実行するには、次のようにします。

```
SELECT pay_salary(6000.00, 0.2, 0.0565, 0.0606, 0.1)
FROM DUAL;
```

ODBC 内で pay_salary を実行するには、次のようにします。

```
SQLExecDirect(hstm,
   "SELECT pay_salary(6000.00,0.2,0.0565,0.0606,0.1)
   FROM DUAL);
```

pay_salary への引数が定数のため、FROM 句ではダミー表 DUAL を指定します。この SELECT 文により、次の出力が生成されます。

```
Net salary is 2502.6
```

2.3.2 モデル 2: アタッチ済ストアド・プロシージャ開発モデルの使用

この項では、クラスを表にアタッチしてストアド・プロシージャを作成する方法を説明します。この方法は Oracle Lite 固有のものです。ここで説明されている方法で Oracle データベースの表にクラスをアタッチすることはできません。「モデル 1: ロード・パブリッシュ・ストアド・プロシージャ開発モデルの使用」に説明されているストアド・プロシージャ開発用のロード・パブリッシュ・モデルがサポートするのは、クラスの（静的）メソッドのみですが、クラスを表にアタッチすると、Java クラスとインスタンスのメソッドを格納しコールできます。

アタッチ済ストアド・プロシージャを作成するには、アタッチするクラスを開発します。クラスがエラーなしでコンパイルされ実行されることを確認します。次に、クラスを Oracle Lite の表にアタッチします。クラスがアタッチされると、クラス内のメソッドがその表の表レベルおよび行レベルのストアド・プロシージャになります。

2.3.2.1 表への Java クラスのアタッチ

表に Java クラスをアタッチするには、SQL コマンドの ALTER TABLE を使用します。ALTER TABLE コマンドの構文は、次のとおりです。

```
ALTER TABLE [schema.]table
   ATTACH JAVA {CLASS|SOURCE} "cls_or_src_name "
```

```
IN {DATABASE|'cls_or_src_path '}
[WITH CONSTRUCTOR ARGS (col_name_list )]
```

アタッチできるのは、ソースまたはクラスです。ソースは、システム・パスにある Java コンパイラによりコンパイルされます。

cls_or_src_name は、クラスまたはソースの完全修飾名を示します。Oracle.lite.Customer のように、パッケージ名の後にクラス名が続きます。クラスまたはソース・ファイル名にはファイル拡張子を含めないでください。名前の大 / 小文字は区別されます。小文字を使用する場合は、名前を二重引用符（""）で囲みます。cls_or_src_name で指定されるパッケージ内にソースまたはクラスがあることを確認します（サンプル・クラス Customer のソースには、行「package Oracle.lite;」が含まれています）。クラスは、データベースの同一パッケージ内に格納されます。パッケージが存在していない場合は Oracle Lite により作成されます。

Java クラスをデータベースの別の表にすでにアタッチしてある場合は、IN DATABASE 句を使用できます。クラスがまだアタッチされていない場合は、クラスまたはソースのディレクトリ位置を cls_or_src_path に指定します。

行レベルのストアド・プロシージャを実行する前に、Oracle Lite がその行に Java オブジェクトを作成します（Java オブジェクトが存在しない場合）。ALTER TABLE 文に WITH CONSTRUCTOR 句が含まれている場合は、col_name_list に含まれている列のデータ型に最適のクラス・コントラクタを使用して、Oracle Lite がこのオブジェクトを作成します。ALTER TABLE 文に WITH CONSTRUCTOR 句が含まれていない場合は、Oracle Lite はデフォルトのコンストラクタを使用します。

表の中に定義されているメソッドに関する情報を取り出すには、ODBC 関数の SQLProcedures と SQLProcedureColumns を使用できます。

2.3.2.2 表レベルのストアド・プロシージャ

表レベルのストアド・プロシージャは、Java クラスの静的メソッドです。このため、メソッドの実行時に Oracle Lite がメソッドの属するクラスをインスタンス化することはありません。コール文の中では、表レベルのストアド・プロシージャは *table_name.method_name* として参照されます。

文レベルのトリガーと BEFORE INSERT および AFTER DELETE 行レベル・トリガー（「文レベルのトリガーと行レベルのトリガーの比較」を参照）は、表レベルのストアド・プロシージャであることが必要です。

2.3.2.3 行レベルのストアド・プロシージャ

行レベルのストアド・プロシージャは、Java クラスの非静的メソッドです。行レベルのストアド・プロシージャを実行するために、Oracle Lite はそのプロシージャが属するクラスをインスタンス化します。クラス・コンストラクタへの引数によって、コンストラクタがクラス・インスタンスの作成にパラメータとして使用する列値が決定されます。コール文の中では、行レベルのストアド・プロシージャは method_name（表修飾子なし）として参照され

ます。行レベル・トリガーは、行レベル・ストアド・プロシージャを間接的に実行できます。

2.3.2.4 アタッチ済ストアド・プロシージャのコール

ALTER TABLE 文を使用してクラスを表にアタッチした後は、SELECT 文を使用してこのプロシージャをコールできます。表レベルのストアド・プロシージャは *table_name.method_name* として参照し、行レベルのプロシージャは *method_name* として参照します。

たとえば、表レベルのストアド・プロシージャを実行するには、次のように指定します。

```
SELECT table_name.proc_name[arg_list]
   FROM {DUAL|[schema.]table WHERE condition};
```

`proc_name` は、表レベルのストアド・プロシージャの名前です。`arg_list` の各引数は、定数かまたは表内の列への参照です。`arg_list` のすべての引数が定数の場合は、FROM 句でダミー表 DUAL を参照する必要があります。

行レベルのストアド・プロシージャは、次のように実行します。

```
SELECT [schema.]proc_name[arg_list]
   FROM [schema.]table
   WHERE condition;
```

プロシージャを *table_name.method_name* の書式でコールし、その名前の表またはメソッドが存在しない場合、Oracle Lite では、*table_name* がスキーマ名を意味し、*method_name* がプロシージャ名を意味すると解釈されます。*method_name* のみを参照する場合、Oracle Lite では参照されたメソッドが行レベル・プロシージャであると解釈されます。ただし、そのようなプロシージャが定義されていない場合、Oracle Lite では *method_name* が現在のスキーマ内のプロシージャを意味すると解釈されます。

注意： Oracle Lite では、Oracle8*i* SQL の CALL 文を使用してストアド・プロシージャを起動できません。

CallableStatement を使用して、ODBC または JDBC アプリケーションからプロシージャを実行できます。詳細は、第 3 章「Java Database Connectivity（JDBC）」を参照してください。また、「Java ストアド・プロシージャの ODBC からのコール」も参照してください。

2.3.2.5 アタッチ済ストアド・プロシージャの削除

ストアド・プロシージャを削除するには、ALTER TABLE コマンドを使用します。ALTER TABLE コマンドの構文は、次のとおりです。

```
ALTER TABLE [schema.]table
   DETACH [AND DELETE] JAVA CLASS "class_name"
```

注意： クラス名に小文字が含まれている場合は、クラス名を二重引用符（" "）で囲む必要があります。

Java クラスをデタッチしてもデータベースからは削除されません。データベースから Java クラスを削除するには、DETACH AND DELETE 文を使用します。

Java クラスをストアド・プロシージャまたはトリガーとして起動した後に、その Java クラスをデータベースから削除した場合、そのクラスはアプリケーションにアタッチされている JVM の中に残ります。クラスを JVM からアンロードするには、（必要な場合）データベースの変更をコミットし、データベースに接続しているアプリケーションをすべてクローズします。Java クラスを置き換えるには、データベースへの接続をすべてクローズしてから Java クラスをリロードする必要があります。

2.3.2.6 例

次の例は、Oracle Lite に Java ストアド・プロシージャを作成する方法を示します。この例では、Java メソッド `paySalary` を表 EMP に格納します。`paySalary` は、従業員の手取り給与を計算します。

この例には次の手順が含まれています。

- 手順 1: 表の作成
- 手順 2: Java クラスの作成
- 手順 3: Java クラスの表へのアタッチ
- 手順 4: メソッドの実行

手順 1: 表の作成

次の SQL コマンドを使用して表を作成します。

```
CREATE TABLE EMP(Col1 char(10));
```

手順 2: Java クラスの作成

Employee.java ファイルに Java クラス `Employee` を作成します。`Employee` クラスは `paySalary` メソッドを実装します。

```
import java.sql.*;
public class Employee {
   public static String paySalary(float sal, float fica, float sttax,
                           float ss_pct, float espp_pct)  {
      float deduct_pct;
      float net_sal;
        // compute take-home salary
      deduct_pct = fica + sttax + ss_pct + espp_pct;
      net_sal = sal * deduct_pct;
```

```
      String returnstmt = "Net salary is " + net_sal;
      return returnstmt;
   } // paySalary
}
```

手順 3: Java クラスの表へのアタッチ
MSQL から、次のように ALTER TABLE コマンドを使用して Java クラスをアタッチします。

```
ALTER TABLE EMP ATTACH JAVA SOURCE "Employee" IN 'C:¥tmp';
```

このコマンドは、ディレクトリ C:¥tmp にある Employee クラスの Java ソースを EMP 表にアタッチします。

手順 4: メソッドの実行
paySalary メソッドを MSQL で実行するには、次の文を入力します。

```
SELECT EMP."paySalary"(6000.00,0.2,0.0565,0.0606,0.1)
   FROM DUAL;
```

ODBC から paySalary を実行するには、SQLExecDirect を起動します。

```
SQLExecDirect(hstm,
   "SELECT EMP.¥"paySalary¥"(6000.00,0.2,0.0565,0.0606,0.1)
   FROM DUAL);
```

この文により、次の結果が生成されます。

```
Net salary is 2502.6
```

2.3.3 Java ストアド・プロシージャの ODBC からのコール

C または C++ のマルチスレッド・アプリケーションから Java ストアド・プロシージャを起動するには、アプリケーションの main 関数から **loadjvm40.dll** をロードする必要があります。これにより、C または C++ アプリケーションがストアド・プロシージャを直接または間接的に起動する複数のスレッドを作成するときに、JVM のガベージ・コレクションで発生する問題が解決されます。スレッドは、終了するまで JVM からデタッチされないため、JVM のメモリーが足りなくなります。Oracle Lite では、そのスレッドを作成したのが JVM かユーザー・アプリケーションかを判断できないため、スレッドのデタッチは行われません。

main では、次のように、すべてのアクションの前にライブラリをロードする必要があります。

```
int main (int argc, char** argv)
{
   LoadLibrary("loadjvm40.dll");
   ...
```

```
}
```

このライブラリは、JVM をアプリケーションのメイン・スレッドにロードします。このライブラリは、スレッドがプロセスからデタッチされた場合は、スレッドを JVM からデタッチしようとします。**loadjvm40.dll** は、スレッドが JVM にアタッチされていない場合でも正しく動作します。

2.4 Java データ型

Oracle Lite は、標準 SQL の規則に基づいて Java と SQL の間でデータ型の変換を実行します。たとえば、文字列を引数として取るストアド・プロシージャに整数を渡すと、Oracle Lite はその整数を文字列に変換します。行レベル・トリガーの引数の詳細は、「トリガーの引数」を参照してください。Java と SQL 間のデータ型の対応付け一覧は、第 1 章「Oracle Lite の Java サポート」の表 1-1「データ型の変換」および 1.1 項「Java データ型」を参照してください。

> **注意：** Oracle データベースでは、DATE 列は TIMESTAMP として作成されます。トリガー・メソッドもそのように指定する必要があります。

Java では、メソッドの有効範囲外にある引数の値をメソッドで変更できません。ただし、Oracle Lite では、IN、OUT および IN/OUT パラメータをサポートします。

Java データ型の多くは不変であるか、NULL 値をサポートしません。このようなデータ型に NULL 値を渡して IN/OUT パラメータを使用する場合は、ストアド・プロシージャでその型の配列か同等のオブジェクト型を使用できます。表 2-2 に、整数を IN/OUT パラメータとして使用可能にするため、または NULL 値を設定するために使用できる、Java の整数データ型を示します。

表 2-2 Java の整数データ型

Java の引数	IN/OUT	NULL
`int`	いいえ	いいえ
`int[]`	はい	はい
`Integer`	いいえ	はい
`Integer[]`	はい	はい
`int[][]`	はい	はい

`Date` などの可変 Java データ型を使用すると、NULL または IN/OUT パラメータを渡すことができますが、ストアド・プロシージャから引数の NULL 状態を変更する必要がある場合は、`Date` 配列を使用してください。

注意： NULL ではあり得ない Java 引数に NULL を渡すと、エラーが発生します。

2.4.1 パラメータの宣言

Java メソッドの戻り値は、プロシージャの OUT パラメータに設定できます。プリミティブ型または不変参照型は、IN パラメータに設定できます。可変参照型または配列型は、IN/OUT パラメータに設定できます。表 2-3 に、対応する Oracle Lite パラメータを IN/OUT パラメータにするために使用する Java データ型を示します。

表 2-3 Oracle Lite IN/OUT パラメータの Java データ型

IN/OUT パラメータの型	使用するデータ型
Number	`Integer[]` または `int[]`
Binary	`byte[]` または `byte[][]`
String	`string[]`

ストアド・プロシージャが `java.sql.Connection` を取る場合、Oracle Lite はカレント・トランザクションまたはカレント行の値を使用して、引数を自動的に指定します。この引数は、プロシージャに渡される最初の引数です。

2.4.2 ストアド・プロシージャを使用して複数行を返す方法

ストアド・プロシージャを使用して複数行を返すことができます。ただし、複数行を返すストアド・プロシージャを起動できるのは、JDBC アプリケーションまたは ODBC アプリケーションからのみです。ストアド・プロシージャで複数行を返すには、対応する Java メソッドが `java.sql.ResultSet` オブジェクトを返す必要があります。SELECT 文字列を実行することにより、Java メソッドは `ResultSet` オブジェクトを取得して返します。`ResultSet` の列名は SELECT 文に指定します。結果列を、表で使用されている名前ではなく別の名前で呼ぶ必要がある場合は、SELECT 文で結果列の別名を使用する必要があります。例を次に示します。

```
SELECT emp.name Name,  dept.Name Dept
   FROM  emp, dept
   WHERE emp.dept# = dept.dept#;
```

複数行を返すストアド・プロシージャの戻り型は `java.sql.ResultSet` である必要があるため、結果の列名または型の取得に、そのストアド・プロシージャのシグネチャは使用できません。この結果、ストアド・プロシージャの結果の列名または型を追跡する別の表を設計する必要があります。たとえば、前述の SELECT 文を Java メソッドに埋め込んだ場合、このメソッドの戻り型は `char Name` や `char Dept` ではなく、`java.sql.ResultType` です。

注意： 複数行を返す Java ストアド・プロシージャの作成に使用できるのは、「モデル 2: アタッチ済ストアド・プロシージャ開発モデルの使用」で説明されているアタッチ済ストアド・プロシージャ開発モデルのみです。

2.4.2.1 ODBC を使用して複数行を返す方法

複数行を返すストアド・プロシージャを ODBC アプリケーションで実行するには、次の CALL 文を使用します。P はストアド・プロシージャの名前で、a_1 から a_n はストアド・プロシージャへの引数です。

```
{CALL P(a1,...,an)}
```

文を実行する前に値をバインドする必要がある引数には、マーカー（?）を使用します。文が実行されるとプロシージャが実行され、結果セット上のカーソルが文ハンドル内に格納されます。文ハンドルを使用して順次フェッチを行い、プロシージャから行を返します。

CALL 文を実行した後は、SQLNumResultCols を使用してそれぞれの結果行の列数を見つけ出します。列の名前とデータ型を返すには、SQLDescribeCol 関数を使用します。

2.4.2.2 例

次の例は、ODBC を使用して、複数行を返すストアド・プロシージャを実行する方法を示します。この例では、SQLNumResultCols 関数も SQLDescribeCol 関数も使用されていません。ここでは、ストアド・プロシージャが作成済で、PROC として SQL にパブリッシュされていると想定されています。PROC は引数として整数を取ります。

```
rc = SQLPrepare(StmtHdl, "{call PROC(?)}", SQL_NTS);
CHECK_STMT_ERR(StmtHdl, rc, "SQLPrepare");

rc = SQLBindParameter(StmtHdl, 1, SQL_PARAM_INPUT_OUTPUT,
   SQL_C_LONG,SQL_INTEGER, 0, 0, &InOutNum, 0, NULL);
CHECK_STMT_ERR(StmtHdl, rc, "SQLBindParameter");

rc = SQLExecute(StmtHdl);
CHECK_STMT_ERR(StmtHdl, rc, "SQLExecute");

/* you can use SQLNumResultCols and SQLDescribeCol here */

rc = SQLBindCol(StmtHdl, 1, SQL_C_CHAR, c1, 20, &pcbValue1);
CHECK_STMT_ERR(StmtHdl, rc, "SQLBindCol");

rc = SQLBindCol(StmtHdl, 2, SQL_C_CHAR, c2, 20, &pcbValue2);
CHECK_STMT_ERR(StmtHdl, rc, "SQLBindCol");

while ((rc = SQLFetch(StmtHdl)) != SQL_NO_DATA_FOUND) {
   CHECK_STMT_ERR(StmtHdl, rc, "SQLFetch");
```

```
   printf("%s, %s¥n", c1, c2);
}
```

2.5 トリガーの使用方法

トリガーとは、特定のイベントが発生したときに実行（起動）されるストアド・プロシージャのことです。トリガーは、列が更新されたとき、または行が追加あるいは削除されたときに起動されます。トリガーはイベントの前または後で起動できます。

トリガーは、一般的には、データベースのビジネス・ルールを施行するために使用します。たとえば、トリガーは入力値を検証し、無効な挿入を拒否できます。同様に、トリガーを使用すると、特定の行を削除する前に、その行に依存するすべての表を一貫性のある状態にすることができます。

2.5.1 文レベルのトリガーと行レベルのトリガーの比較

トリガーには、行レベルと文レベルの 2 種類があります。行レベル・トリガーは、データベースへの変更により影響される各行に対して 1 回起動されます。文レベル・トリガーは、変更により複数行が影響される場合でも、1 回のみ起動されます。

行オブジェクトのインスタンスを生成してプロシージャをコールできないため、BEFORE INSERT トリガーと AFTER DELETE トリガーが起動できるのは、表レベルのストアド・プロシージャのみです。AFTER INSERT、BEFORE DELETE および UPDATE の各トリガーでは、表レベルまたは行レベルのストアド・プロシージャを起動できます。

2.5.2 トリガーの作成

トリガーを作成するには、CREATE TRIGGER コマンドを使用します。CREATE TRIGGER 文の構文は次のとおりです。

```
CREATE [OR REPLACE] TRIGGER trigger_name {BEFORE | AFTER} [{INSERT | DELETE |
   UPDATE [OF column_list]} [OR ]] ON table_reference
   [FOR EACH ROW] procedure_ref
   (arg_list)
```

CREATE TRIGGER の構文では、次の点に注意してください。

- OR 句は、複数のトリガー・イベントの指定に使用します。
- FOR EACH ROW は、行レベル・トリガーの作成に使用します。表レベル・トリガーの場合は、この句は指定しません。
- `procedure_ref` は、実行するストアド・プロシージャの識別に使用します。

1 つの表に対して、同じ種類のトリガーを複数作成できます。ただし、各トリガーにはスキーマ内で一意の名前を指定する必要があります。

次の例では、プロシージャを PROCESS_NEW_HIRE として格納しパブリッシュしてあるものとします。トリガー AIEMP は、EMP 表に行が 1 つ挿入されるたびに起動されます。

```
CREATE TRIGGER AIEMP AFTER INSERT ON EMP FOR EACH ROW
   PROCESS_NEW_HIRE(ENO);
```

表の複数の列に対して同じストアド・プロシージャを使用する UPDATE トリガーは、文の中で列のサブセットが変更されたときに 1 回のみ起動されます。たとえば、次の文は表 T に BEFORE UPDATE トリガーを作成します。表 T には、C1、C2、C3 という列があります。

```
CREATE TRIGGER T_TRIGGER BEFORE UPDATE OF C1,C2,C3 ON T
   FOR EACH ROW trigg(old.C1,new.C1,old.C2,new.C2,
   old.C3,new.C3);
```

この UPDATE 文は、T_TRIGGER を 1 回のみ起動します。

```
UPDATE T SET C1 = 10, C2 = 10 WHERE ...
```

2.5.2.1 トリガーの使用可能と使用禁止

トリガーは、作成すると自動的に使用可能になります。トリガーを使用禁止にするには、ALTER TABLE 文か ALTER TRIGGER 文を使用します。

トリガーを個別に使用可能または使用禁止にするには、ALTER TRIGGER 文を使用します。ALTER TRIGGER 文の構文は次のとおりです。

```
ALTER TRIGGER <trigger_name> {ENABLE | DISABLE}
```

表にアタッチされているすべてのトリガーを使用可能または使用禁止にするには、ALTER TABLE 文を使用します。

```
ALTER TABLE <table_name> {ENABLE | DISABLE} ALL TRIGGERS
```

2.5.3 トリガーの削除

トリガーを削除するには、DROP TRIGGER 文を使用します。DROP TRIGGER 文の構文は次のとおりです。

```
DROP TRIGGER [schema.]trigger
```

2.5.4 トリガーの例

次の例ではトリガーを作成します。「モデル 2: アタッチ済ストアド・プロシージャ開発モデルの使用」で説明されている開発モデルに従って作成します。ロード・パブリッシュ・モデルを使用したトリガー作成の例は、「トリガーの引数の例」を参照してください。この例で

は、まず、表と Java クラスを作成します。次に、クラスを表にアタッチします。最後に、トリガーを作成して起動します。

SalaryTrigger クラスには check_sal_raise メソッドが含まれています。このメソッドは、従業員が 10% を超える昇給を受ける場合はメッセージを出力します。EMP 表内の給与を更新する前に、トリガーがメソッドをコールします。

check_sal_raise はメッセージを標準出力に書き込むため、この例にある MSQL コマンドは MSQL を使用して発行します。コマンド・プロンプトで、次のように入力して MSQL を起動します。

```
msql username/password@connect_string
```

connect_string は JDBC URL 構文です。たとえば、デフォルト・データベースにユーザー SYSTEM として接続するには、DOS プロンプトで次のように入力します。

```
msql system/pw@odbc:polite
```

MSQL コマンドラインで、次のように EMP 表を作成して値を挿入します。

```
CREATE TABLE EMP(E# int, name char(10), salary real,
   Constraint E#_PK primary key (E#));

INSERT INTO EMP VALUES (123,'Smith',60000);
INSERT INTO EMP VALUES (234,'Jones',50000);
```

次のクラスを **SalaryTrigger.java** に入れます。

```
class SalaryTrigger {
   private int eno;
   public SalaryTrigger(int enum) {
      eno = enum;
   }
   public void check_sal_raise(float old_sal,
      float new_sal)
   {
      if (((new_sal - old_sal)/old_sal) > .10)
      {
         // raise too high  do something here
         System.out.println("Raise too high for employee " + eno);
      }
   }
}
```

SalaryTrigger クラス・コンストラクタは整数を引数にとり、この整数を属性 eno（従業員番号）に割り当てます。表 EMP の各行（つまり各従業員ごと）に SalaryTrigger が作成されます。

check_sal_raise メソッドは非静的メソッドです。実行するには、そのクラスのオブジェクトがこのメソッドをコールする必要があります。EMP の行の salary 列が更新されるたびに、その行に対応する SalaryTrigger コンストラクタへの引数として従業員番号（*E#*）を使用して、このコンストラクタのインスタンスが（存在しない場合は）作成されます。次に、トリガーが check_sal_raise メソッドをコールします。

Java クラスを作成した後は、次のように、クラスを表にアタッチします。

```
ALTER TABLE EMP ATTACH JAVA SOURCE "SalaryTrigger" IN '.'
   WITH CONSTRUCTOR ARGS(E#);
```

この文は、Oracle Lite に対して、現在のディレクトリにある Java ソース **SalaryTrigger.java** をコンパイルし、結果のクラスを EMP 表にアタッチするように指示します。また、この文は、Oracle Lite がクラスのインスタンスを生成するときに、E# 列にある値を引数として取るコンストラクタを使用するように指定します。

クラスを表にアタッチした後、次のように、トリガーを作成します。

```
CREATE TRIGGER CHECK_RAISE BEFORE UPDATE OF SALARY ON EMP FOR EACH ROW
   "check_sal_raise"(old.salary, new.salary);
/
```

この文は、check_raise というトリガーを作成します。このトリガーは、EMP 表のいずれかの行の salary 列が更新される前に、check_sal_raise メソッドをコールします。Oracle Lite は、salary 列の古い値と新しい値をメソッドの引数として渡します。

この例では、行レベル・トリガーが行レベル・プロシージャ（非静的メソッド）を起動します。行レベル・トリガーは、表レベル・プロシージャ（静的メソッド）を起動することもできます。ただし、文レベル・トリガーは文全体に対して 1 回起動され、文が複数行に影響する可能性があるため、文レベル・トリガーは表レベル・プロシージャを 1 回しか起動できません。

次のコマンドは、salary 列を更新しトリガーを起動します。

```
UPDATE EMP SET SALARY = SALARY + 6100  WHERE E# = 123;
```

これにより、次の出力が生成されます。

```
Raise too high for employee 123
```

2.5.5 トリガーの引数

「モデル 2: アタッチ済ストアド・プロシージャ開発モデルの使用」で説明されているように、アタッチ済ストアド・プロシージャを使用する場合は、行レベル・トリガーは Java から SQL への型変換をサポートしません。このため、トリガー引数の Java データ型は、トリガー列の対応する SQL データ型（「Java データ型」を参照）に一致している必要があります。ただし、ロード・パブリッシュ・モデルを使用する場合は、Oracle Lite がデータ型のキャストをサポートします。

次の表に、それぞれの列のタイプで有効なトリガー引数を示します。

表 2-4 トリガーの引数

トリガーの引数	新規列のアクセス	古い列のアクセス
insert	はい	いいえ
delete	いいえ	はい
update	はい	はい

注意： java.sql.Connection オブジェクトを引数として持つトリガーは、リレーショナル・モデルを使用するアプリケーションでのみ使用できます。

2.5.6 トリガーの引数の例

次の例は、IN/OUT パラメータを使用するトリガーの作成方法を示します。

1. まず、Java クラス EMPTrigg を作成します。

```
import java.sql.*;

public class EMPTrigg {
   public static final String goodGuy = "Oleg";

   public static void NameUpdate(String oldName, String[] newName)
   {
      if (oldName.equals(goodGuy))
         newName[0] = oldName;
   }

   public static void SalaryUpdate(String name, int oldSalary,
          int newSalary[])
   {
      if (name.equals(goodGuy))
         newSalary[0] = Math.max(oldSalary, newSalary[0])*10;
   }

   public static void AfterDelete(Connection conn,
                     String name, int salary) {
      if (name.equals(goodGuy))
         try {
            Statement stmt = conn.createStatement();
            stmt.executeUpdate(
             "insert into employee values('" + name + "', " +
```

```
                        salary + ")");
            stmt.close();
          } catch(SQLException e) {}
      }
  }
```

2. 新規の表 EMPLOYEE を作成し、これに値を挿入します。

```
CREATE TABLE EMPLOYEE(NAME VARCHAR(32), SALARY INT);
INSERT INTO EMPLOYEE VALUES('Alice', 100);
INSERT INTO EMPLOYEE VALUES('Bob', 100);
INSERT INTO EMPLOYEE VALUES('Oleg', 100);
```

3. 次に、クラスを Oracle Lite にロードします。

```
CREATE JAVA CLASS USING BFILE ('c:¥myprojects', 'EMPTrigg.class');
```

4. CREATE PROCEDURE 文を使用して、コールする EMPTrigg メソッドをパブリッシュします。

```
CREATE PROCEDURE NAME_UPDATE(
   OLD_NAME IN VARCHAR2, NEW_NAME IN OUT VARCHAR2)
   AS LANGUAGE JAVA NAME
   'EMPTrigger.NameUpdate(java.lang.String, java.lang.String[])';
   /

CREATE PROCEDURE SALARY_UPDATE(
   ENAME VARCHAR2, OLD_SALARY INT, NEW_SALARY IN OUT INT)
   AS LANGUAGE JAVA NAME
   'EMPTrigger.SalaryUpdate(java.lang.String, int, int[])';
   /

CREATE PROCEDURE AFTER_DELETE(
   ENAME VARCHAR2, SALARY INT)
   AS LANGUAGE JAVA NAME
   'EMPTrigger.AfterDelete(java.sql.Connection,
          java.lang.String, int)';
   /
```

5. ここで、各プロシージャにトリガーを作成します。

```
CREATE TRIGGER NU BEFORE UPDATE OF NAME ON EMPLOYEE FOR EACH ROW
   NAME_UPDATE(old.name, new.name);

CREATE TRIGGER SU BEFORE UPDATE OF SALARY ON EMPLOYEE FOR EACH ROW
   SALARY_UPDATE(name, old.salary, new.salary);

CREATE TRIGGER AD AFTER DELETE ON EMPLOYEE FOR EACH ROW
```

```
   AFTER_DELETE(name, salary);
```

6. 次のコマンドを入力し、トリガーを起動して結果を表示します。

```
SELECT * FROM EMPLOYEE;
UPDATE EMPLOYEE SET SALARY=0 WHERE NAME = 'Oleg';
SELECT * FROM EMPLOYEE;

DELETE FROM EMPLOYEE WHERE NAME = 'Oleg';
SELECT * FROM EMPLOYEE;

UPDATE EMPLOYEE SET NAME='TEMP' WHERE NAME = 'Oleg';
DELETE FROM EMPLOYEE WHERE NAME = 'TEMP';

SELECT * FROM EMPLOYEE;
```

3

Java Database Connectivity（JDBC）

この章では、Oracle Lite の Java Database Connectivity（JDBC）に対するサポートを説明します。説明する内容は、次のとおりです。

- 3.1 項「JDBC 規格への準拠」
- 3.2 項「JDBC 環境の設定」
- 3.4 項「JDBC からの Java ストアド・プロシージャの実行」
- 3.5 項「Oracle Lite での拡張」
- 3.6 項「制限事項」

> **注意：** Oracle Lite JDBC ドライバの使用例は、付録 C.2.1「JDBC のサンプルの実行」を参照してください。

3.1 JDBC 規格への準拠

JDBC とは、Java プログラムからリレーショナル・データベースにアクセスするためのアプリケーション・プログラミング・インタフェースです。Oracle Lite では、Java アプリケーションが Oracle Lite のオブジェクト・リレーショナル・データベース・エンジンと直接通信できるネイティブな JDBC ドライバを提供しています。Oracle Lite の JDBC 実装は、JDBC 1.22 に準拠しています。さらに、Oracle Lite では JDBC 2.0 で指定されている特定の拡張機能を提供しています。Oracle Lite の拡張は、Oracle8*i* の JDBC 実装と互換性があります。JDBC の詳細は、Sun 社の Web サイトを参照してください。

3.2 JDBC 環境の設定

クライアント / サーバー・モデルを使用する場合、**olite40.jar** がサーバー・マシンのシステム CLASSPATH にあり、クライアント・マシンのユーザー CLASSPATH にある必要があります。

3.3 Oracle Lite データベースへの接続

Oracle Lite データベースに接続するには、JDK1.3.x 以上が必要です。

Oracle Lite データベースに接続するには、次の 2 つの方法があります。

- データベースが JDBC アプリケーションと同じコンピュータにある場合は、ネイティブ・ドライバ接続 URL 構文を使用してデータベースに接続します。
- データベースがサーバー上にあり、クライアント・コンピュータから接続する場合は、タイプ 2 ドライバ接続 URL 構文を使用して接続します。
- どちらのドライバも **olite40.jar** のコンポーネントです。これら 2 つのドライバは、JDBC1.0 規格に準拠しています。

ネイティブ・ドライバ接続 URL 構文

```
jdbc:polite[:uid / pwd]:dsn [;key=value]*
```

次の引数は、DSN 句の一部とすることも、個別のキー値のペアとすることもできます。ドライバに追加情報を提供するキー値のペアは、出現する場合と出現しない場合があります。DSN で指定できる情報はすべて、キー値のペアとして指定できます。情報をキー値のペアとして指定すると、DSN で指定した情報は必ず上書きされます。

各引数に対する URL の解釈とキー値のペアのオプションは、次のとおりです。

引数	説明
jdbc	プロトコルを JDBC として識別する。
polite	サブプロトコルを polite として識別する。

引数	説明
uid / pwd	Oracle Lite データベースのオプションのユーザー ID およびパスワード。この引数を指定すると、データ・ソース名（DSN）およびキー値のペアでのユーザー ID およびパスワードの指定が上書きされる。
dsn	**odbc.ini** ファイル内のデータ ソース名（DSN）のエントリを識別する。このエントリには、サーバーへの接続を完了するために必要な情報がすべて含まれている。
DataDirectory=	.odb ファイルが常駐しているディレクトリ。
Database=	作成時に指定したデータベース名。
IsolationLevel=	トランザクション分離レベル。READ COMMITTED、REPEATABLE READ、SERIALIZABLE または SINGLE USER。分離レベルの詳細は、各プラットフォーム用の開発者ガイドを参照。
Autocommit=	コミット動作。ON または OFF。
CursorType=	カーソル動作。DYNAMIC、FORWARD ONLY、KEYSET DRIVE または STATIC。カーソル・タイプの詳細は、各プラットフォーム用の開発者ガイドを参照。
UID=	ユーザー名。
PWD=	パスワード。
key=value	

例

Oracle Lite JDBC ドライバをロードした後は、JDBC アプリケーションから Oracle Lite データベースに接続できます。例を次に示します。

```
String ConnectMe=("jdbc:polite:SCOTT/tiger:polite;DataDirectory=c:¥Oracle_
Home;Database=polite;IsolationLevel=SINGLE;USER;Autocommit=ON;CursorType=DYNAMIC")

try {
   Connection conn = DriverManager.getConnection(ConnectMe)
   }
catch (SQLException e)
{
   ...
}
```

タイプ 2 ドライバ接続 URL 構文

```
jdbc:polite[:uid / pwd]@[host]:[port]:dsn [;key=value]*
```

ネイティブ・ドライバ接続と同様、タイプ 2 ドライバ接続では、次の引数を、DSN 句の一部として使用することも、ドライバに追加情報を提供するオプションのキー値のペアとして使用することもできます。情報をキー値のペアとして指定すると、DSN で指定した情報は必ず上書きされます。

引数	説明
jdbc	プロトコルを JDBC として識別する。
polite	サブプロトコルを polite として識別する。
UID	ユーザー名。
PWD	パスワード。
host	Oracle Lite データベースのホストとなり、ODBC アダプタ・サービス **olsv2040.exe** が実行されるマシンの名前。このホスト名はオプション。未指定の場合のデフォルト値は、JDBC アプリケーションが実行されるローカル・マシンの名前。
port	ODBC アダプタ・サービスによってリスニングが行われるポート番号。このポート番号はオプションで、未指定の場合のデフォルト値はポート「100」。
dsn	**odbc.ini** ファイル内のデータソース名（DSN）のエントリを識別する。このエントリには、サーバーへの接続を完了するために必要な情報がすべて含まれている。
DataDirectory=	.odb ファイルが常駐しているディレクトリ。
Database=	作成時に指定したデータベース名。
IsolationLevel=	トランザクション分離レベル。READ COMMITTED、REPEATABLE READ、SERIALIZABLE または SINGLE USER。分離レベルの詳細は、各プラットフォーム用の開発者ガイドを参照。
Autocommit=	コミット動作。ON または OFF。
CursorType=	カーソル動作。DYNAMIC、FORWARD ONLY、KEYSET DRIVE または STATIC。カーソル・タイプの詳細は、各プラットフォーム用の開発者ガイドを参照。
UID=	ユーザー名。
PWD=	パスワード。

例

次に、このタイプの接続の例を示します。

```
try {
Connection conn = DriverManager.getConnection(
```

```
   "jdbc:polite
        :polite@URL_Name ;DataDirectory=c:¥Oracle_Home
        ;Database=polite
        ;IsolationLevel=SINGLE USER
        ;Autocommit=ON
        ;CursorType=DYNAMIC","UID","PWD")
}
catch (SQLException e)
{
   ...
}
```

getConnection メソッドの最初の引数は JDBC URL です。

2 番目の引数は、接続先のカタログ名またはユーザー名です。すべての Oracle Lite データベースには、system というカタログ名が付いています。

3 番目の引数はパスワードです。データベースが暗号化されている場合は、パスワードを指定する必要があります。

getConnection メソッドは try-catch ブロックで囲んで、接続試行中に SQL 例外が発生しないようにします。catch ブロックに例外処理文を挿入できます。

タイプ 4（Pure Java）ドライバ接続 URL 構文

タイプ 4 ドライバの URL 構文は、次のとおりです。

```
jdbc:polite4[:uid/pwd]@[host]:[port]:dsn[;key=value]*
```

パラメータ 4 は、タイプ 4 ドライバが使用されていることを示します。残りのパラメータの詳細は、前述のタイプ 2 ドライバの該当パラメータの定義を参照してください。

3.4 JDBC からの Java ストアド・プロシージャの実行

Java ストアド・プロシージャを作成した後は、次のようにして、JDBC アプリケーションからプロシージャを実行できます。

- ストアド・プロシージャを実行する SQL の SELECT 文字列を Statement.executeQuery メソッドに渡します。
- JDBC CallableStatement を使用します。

> **注意：** ストアド・プロシージャの作成方法の詳細は、第 2 章「Java ストアド・プロシージャとトリガー」を参照してください。

executeQuery メソッドは、表レベルおよび行レベルのストアド・プロシージャを実行します。CallableStatement は、現時点では表レベルのストアド・プロシージャの実行以外はサポートしていません。

3.4.1 ExecuteQuery メソッドの使用方法

executeQuery メソッドを使用してストアド・プロシージャをコールするには、まず、Statement オブジェクトを作成します。このオブジェクトには、カレントの Connect オブジェクトの createStatement メソッドにより返された値を割り当てます。次に Statement.executeQuery メソッドをコールします。このメソッドには、Java ストアド・プロシージャを起動する SQL の SELECT 文字列を渡します。

たとえば、表 INVENTORY 上の行レベルのプロシージャ SHIP を、変数 *q* に格納されている引数値を使用して実行するとします。変数 p には、ストアド・プロシージャを実行する製品（行）の製品 ID が含まれています。

```
int res = 0;
Statement s = conn.createStatement();
ResultSet r = s.executeQuery("SELECT SHIP(" + q + ")" +
   "FROM INVENTORY WHERE PID = " + p);
if(r.next()) res = r.getInt(1);
r.close();
s.close();
return res;
```

パラメータを様々に変えてプロシージャを繰り返し実行する場合は、Statement のかわりに PreparedStatement を使用します。PreparedStatement 内の SQL 文はプリコンパイルされているため、PreparedStatement は効率良く実行できます。さらに、PreparedStatement は、文の中で疑問符（?）を使用して IN パラメータを設定できます。ただし、PreparedStatement が LONG や LONG RAW などの LONG 型パラメータを使用する場合は、setAsciiStream、setUnicodeStream または setBinaryStream メソッドを使用して、パラメータをバインドする必要があります。

前述の例で、プロシージャ SHIP でデータベースを更新する場合、前述の問合せを発行するトランザクションの分離レベルが READ COMMITTED であれば、SELECT 文に FOR UPDATE 句を追加する必要があります。次のように指定します。

```
"SELECT SHIP(" + q + ")" +
   FROM INVENTORY WHERE PID = " +
   p + "FOR UPDATE");
```

3.4.2 CallableStatement の使用方法

CallableStatement を使用してストアド・プロシージャを実行するには、次のように、CallableStatement オブジェクトを作成してそのパラメータを登録します。

```
CallableStatement cstmt = conn.prepareCall(
   "{?=call tablename.methodname() }");
cstmt.registerOutParameter(1, ...);
cstmt.executeUpdate();
cstmt.get..(1);
cstmt.close();
```

JDBC の CallableStatement の使用には、次の制限が適用されます。

- JDBC の CallableStatement で実行できるのは、表レベルのストアド・プロシージャのみです。
- IN パラメータと OUT パラメータの両方がサポートされるが、OUT パラメータとして使用する Java データ型に制限が適用されます。詳細は、第 2 章「Java ストアド・プロシージャとトリガー」を参照してください。
- プロシージャ名は Java メソッド名に対応し、大 / 小文字が区別されます。
- PreparedStatement の場合と同じように、CallableStatement が LONG 型（LONG、LONG VARBINARY、LONG VARCHAR、LONG VARCHAR2、LONG RAW など）を使用する場合は、`setAsciiStream`、`setUnicodeStream` または `setBinaryStream` メソッドを使用してパラメータをバインドする必要があります。

注意： `Resultset` オブジェクトや `Statement` オブジェクトなどの JDBC オブジェクトが不要になった場合、オブジェクトをクローズしてシステム・リソースを解放する必要があります。

3.5 Oracle Lite での拡張

Oracle Lite JDBC ドライバは JDBC 1.22 をサポートし、JDBC 2.0 で定義されている特定の機能拡張も提供します。この拡張には、BLOB や CLOB データ型とスクロール可能な結果セットに対するサポートが含まれています。Oracle Lite での JDBC 拡張は、Oracle8*i* の JDBC 実装と互換性があります。ただし、Oracle Lite では Oracle8*i* の JDBC データ型拡張、配列、構造体、`REF` はサポートしていません。

この項では、Oracle Lite のデータ型とデータ・アクセスに関する拡張を説明します。関数の構文やコール・パラメータの詳細は、Sun 社の Javasoft の Web サイトにある『Java 2 仕様』を参照してください。

3.5.1 データ型の拡張

BLOB と CLOB は、データベース表に直接格納するには大きすぎるデータを格納するために使用されます。データベース表には、データではなく、実際のデータの場所を指すロケータが格納されます。BLOB には、非構造化バイナリ・データが大量に含まれ、CLOB には固定幅文字データ（1 文字につき一定のバイト数が必要な文字）が大量に含まれます。

BLOB または CLOB のロケータは、標準の SELECT 文を使用してデータベースから選択できます。SELECT 文を使用して BLOB または CLOB ロケータを選択すると、LOB のロケータのみが取得されます。データ自体は取得されません。ただし、一度ロケータを取得すると、アクセス関数を使用して LOB のデータの読込みと書込みが可能になります。

表 3-1 に、Oracle Lite BLOB クラスに含まれるメソッドとその説明を示します。

表 3-1 Oracle Lite BLOB クラスのメソッド

関数	説明
`length`	BLOB の長さをバイト単位で返します。
`getBinaryOutputStream`	BLOB データを返します。
`getBinaryStream`	BLOB インスタンスをバイト・ストリームとして返します。
`getBytes`	指定された位置から、BLOB データをバッファに読み込みます。
`getConnection`	カレントの接続を返します。
`isConvertibleTo`	BLOB を特定のクラスに変換できるかどうかを判断します。
`putBytes`	BLOB データ内の指定された位置にバイトを書き込みます。
`makeJdbcArray`	JDBC 配列で表された BLOB を返します。
`toJdbc`	BLOB を JDBC クラスに変換します。
`trim`	指定された長さに切り捨てます。

表 3-2 に、Oracle Lite CLOB クラスに含まれるメソッドとその説明を示します。

表 3-2 Oracle Lite CLOB クラスのメソッド

関数	説明
`length`	CLOB の長さをバイト単位で返します。
`getSubString`	CLOB データ内の指定された位置からサブ文字列を取り出します。
`getCharacterStream`	CLOB データを Unicode ストリームとして返します。
`getAsciiStream`	CLOB インスタンスを ASCII ストリームとして返します。
`getChars`	CLOB データ内の指定された位置からの文字を文字配列に取り出します。
`getCharacterOutputStream`	Unicode ストリームから CLOB データを書き込みます。
`getAsciiOutputStream`	ASCII ストリームから CLOB データを書き込みます。

表 3-2 Oracle Lite CLOB クラスのメソッド（続き）

関数	説明
getConnection	カレントの接続を返します。
putChars	文字配列からの文字を、CLOB データ内の指定された位置に書き込みます。
putString	CLOB データ内の指定された位置にデータを書き込みます。
toJdbc	CLOB を JDBC クラスに変換します。
isConvertibleTo	CLOB を特定のクラスに変換できるかどうかを判断します。
makeJdbcArray	JDBC 配列で表された CLOB を返します。
trim	指定された長さに切り捨てます。

3.5.2 データ・アクセスの拡張

Oracle Lite では、CLOB および BLOB データ型の値を設定および返すアクセス関数が提供されています。さらに、ラージ・オブジェクトに対するストリーム形式のアクセスを可能にする関数が、ストリーム・クラスにより提供されています。

OraclePreparedStatement クラス、OracleCallableStatement クラスおよび OracleResultSet クラスには、LOB に対するアクセス関数が含まれています。

表 3-3 に、OracleResultSet クラスに含まれるデータ・アクセス関数を示します。

表 3-3 OracleResultSet クラスのデータ・アクセス関数

関数	説明
getBLOB	BLOB データを指すロケータを返します。
getCLOB	CLOB データを指すロケータを返します。

POLLobInputStream、POLLobOutputStream、POLClobReader および POLClobWriter は、ストリーム形式のアクセス・クラスです。

POLLobInputStream クラスには、次のデータ・アクセス関数が含まれています。

関数	説明
read	LOB から配列に読み込みます。

POLLobOutputStream クラスには、次のデータ・アクセス関数が含まれています。

関数	説明
write	出力ストリームから LOB に書き込みます。

POLClobReader クラスは、クラス java.io.reader を拡張します。次のデータ・アクセス関数が含まれています。

関数	説明
read	CLOB 内の文字を配列の一部に読み込みます。
ready	ストリームが読み込める状態になっているかどうかを示します。
close	ストリームを閉じます。
markSupported	ストリームで mark 操作がサポートされているかどうかを示します。
mark	ストリーム内のカレント位置にマークを設定します。この後で reset 関数をコールすると、ストリームの位置がマークされた位置に変更されます。
reset	ストリーム内のカレント位置を、マークされた位置にリセットします。ストリームがマークされていない場合、この関数はそのストリームに適した（たとえば、開始位置に戻すなどの）方法でストリームをリセットしようとします。
skip	ストリーム内の文字をスキップします。

POLClobWriter クラスは、クラス java.io.writer を拡張します。次のデータ・アクセス関数が含まれています。

関数	説明
write	文字配列を出力ストリームに書き込みます。
flush	バッファ内のすべての文字を、目的の宛先に書き込みます。
close	ストリームをフラッシュして閉じます。

3.5.2.1 BLOB の読込みを行うサンプル・プログラム

次のサンプルでは、getBinaryStream メソッドを使用して BLOB データをバイト・ストリームに読み込みます。次に、バイト・ストリームをバイト配列に読み込み、読み込まれたバイト数を返します。

```
// Read BLOB data from BLOB locator.
InputStream byte_stream = my_blob.getBinaryStream();
byte [] byte_array = new byte [10];
int bytes_read = byte_stream.read(byte_array);
...
```

3.5.2.2 CLOB への書込みを行うサンプル・プログラム

次のサンプルでは、文字配列にデータを読み込み、次に getCharacterOutputStream メソッドを使用して文字配列を CLOB に書き込みます。

```
java.io.Writer writer;
// read data into a character array
char[] data = {'0','1','2','3','4','5','6','7','8','9'};

// write the array of character data to a CLOB
writer = ((CLOB)my_clob).getCharacterOutputStream();
writer.write(data);
writer.flush();
writer.close();
...
```

3.6 制限事項

書込み中にデータの切捨てが発生すると、SQL データ切捨て例外が発生します。読込み中にデータの切捨てが発生した場合は、SQL データ切捨て警告が表示されます。

Oracle Lite の JDBC クラスと JDBC 2.0 クラスでは、特定のデータ型に同じ名前を使用しています（たとえば、oracle.sql.Blob と java.sql.Blob）。プログラムで oracle.sql.* と java.sql.* を両方ともインポートする場合、完全修飾名を指定せずに重複しているクラスにアクセスしようとすると、コンパイル・エラーが発生する可能性があります。この問題を回避するには、次の方法のいずれかを使用します。

1. BLOB、CLOB およびデータ・クラスに完全修飾名を使用します。
2. クラスを明示的にインポートします（たとえば、import oracle.sql.Blob）。

クラスには常に完全修飾のクラス名が含まれているため、データ型の名前が重複しても実行時に競合は発生しません。

A

ストアド・プロシージャのチュートリアル

この付録では、Java ストアド・プロシージャとトリガーの作成方法を示します。説明する内容は、次のとおりです。

- A.1 項「ストアド・プロシージャとトリガーの作成」
- A.2 項「トリガーの作成」
- A.3 項「コミットまたはロールバック」

A.1 ストアド・プロシージャとトリガーの作成

このチュートリアルでは、Java クラス EMAIL を作成し、Oracle Lite にロードし、このクラスのメソッドを SQL にパブリッシュし、このメソッドのトリガーを作成します。EMAIL クラスはソース・ファイル **EMAIL.java** にあります。このファイルは、Java のサンプル・ディレクトリ *Oracle_Home*¥Mobile¥SDK¥Examples¥Java にあります。

EMAIL には assignEMailAddress というメソッドがあります。このメソッドは、従業員のファースト・ネームの最初の 1 文字とラスト・ネームの最大 7 文字に基づいて、その従業員の電子メール・アドレスを生成します。アドレスがすでに割り当てられている場合、このメソッドは、ファースト・ネームとラスト・ネームの文字を組み合せて一意の電子メール・アドレスを見つけようとします。

クラスを作成した後、MSQL を使用してそのクラスを Oracle Lite にロードします。この例では、SQL の CREATE JAVA 文を使用します。かわりに、loadjava ユーティリティを使用してクラスを Oracle Lite にロードすることもできます。クラスをロードした後、assignEMailAddress メソッドを SQL にパブリッシュします。

最後に、T_EMP（従業員情報が含まれている表）に行が挿入されるたびに assignEMailAddress メソッドを起動するトリガーを作成します。

assignEMailAddress は、引数として、JDBC Connection オブジェクト、従業員の ID 番号、ファースト・ネーム、ミドル・イニシャル、ラスト・ネームを取ります。JDBC Connection オブジェクトは、Oracle Lite により提供されます。assignEMailAddress メソッドを実行するときに Connection オブジェクトの値を指定する必要はありません。このメソッドでは、JDBC Connection オブジェクトを使用して、生成された電子メール・アドレスが一意であることを確認します。

A.1.1 MSQL の起動

MSQL を起動し、デフォルトの Oracle Lite データベースに接続します。このチュートリアルの Java アプリケーションでは標準出力に出力するため、MSQL を使用します。DOS プロンプトから次を入力します。

```
msql system/mgr@odbc:polite
```

SQL プロンプトが表示されます。

A.1.2 表の作成

表を作成するには、次を入力します。

```
CREATE TABLE T_EMP(ENO INT PRIMARY KEY,
   FNAME VARCHAR(20),
   MI CHAR,
   LNAME VARCHAR(20),
   EMAIL VARCHAR(8));
```

A.1.3 Java クラスの作成

c:¥tmp の **EMAIL.java** ファイルに Java クラス EMAIL を作成しコンパイルします。**EMAIL.java** は assignEMailAddress メソッドを実装します。このファイルの内容は、次のとおりです。このファイルは、Oracle_Home¥Mobile¥SDK¥EXAMPLES¥Java ディレクトリからコピーできます。

```
import java.sql.*;

public class EMAIL {
   public static void assignEMailAddress(Connection conn,
            int eno, String fname,String lname)
            throws Exception
   {
      Statement stmt = null;
      ResultSet retset = null;
      String emailAddr;
      int i,j,fnLen, lnLen, rowCount;

      /* create a statement */
      try {
         stmt = conn.createStatement();
      }
      catch (SQLException e)
      {
         System.out.println("conn.createStatement failed: " +
         e.getMessage() + "¥n");
         System.exit(0);
      }
      /* check fname and lname */
      fnLen = fname.length();
      if(fnLen > 8) fnLen = 8;
      if (fnLen == 0)
         throw new Exception("First name is required");
      lnLen = lname.length();
      if(lnLen > 8) lnLen = 8;
      if (lnLen == 0)
         throw new Exception("Last name is required");
      for (i=1; i <= fnLen; i++)
      {
         /* generate an e-mail address */
         j = (8-i) > lnLen? lnLen:8-i;
         emailAddr =
               new String(fname.substring(0,i).toLowerCase()+
               lname.substring(0,j).toLowerCase());
         /* check if this e-mail address is unique  */
         try {
```

```
            retset = stmt.executeQuery(
                   "SELECT * FROM T_EMP  WHERE email = '"+
                   emailAddr+"'");
            if(!retset.next()) {
               /* e-mail address is unique;
               * so update the email column */
               retset.close();
               rowCount = stmt.executeUpdate(
                   "UPDATE T_EMP SET EMAIL = '"
                   + emailAddr + "' WHERE ENO = "
                   + eno);
               if(rowCount == 0)
                  throw new Exception("Employee "+fname+ " " +
                          lname + " does not exist");
               else return;
            }
         }
         catch (SQLException e) {
            while(e != null) {
               System.out.println(e.getMessage());
               e = e.getNextException();
            }
         }
      }
      /* Can't find a unique name */
      emailAddr = new String(fname.substring(0,1).toLowerCase() +
           lname.substring(0,1).toLowerCase() + eno);
      rowCount = stmt.executeUpdate(
           "UPDATE T_EMP SET EMAIL = '"
           + emailAddr + "' WHERE ENO = "
           + eno);
      if(rowCount == 0)
         throw new Exception("Employee "+fname+ " " +
              lname + " does not exist");
      else return;
   }
}
```

A.1.4 Java クラスのロード

EMAIL クラスを Oracle Lite にロードするには、次を入力します。

```
CREATE JAVA CLASS USING BFILE
   ('c:¥tmp', 'EMAIL.class');
```

クラスをロードした後、クラスに変更を加える場合は、次を行う必要があります。

1. dropjava または DROP JAVA CLASS を使用して、データベースからクラスを削除します。
2. 作業をコミットします。
3. MSQL を終了します。
4. MSQL を再起動します。

これで Java Virtual Machine（JVM）からクラスがアンロードされます。

A.1.5 ストアド・プロシージャのパブリッシュ

ストアド・プロシージャのコール仕様を作成すると、そのストアド・プロシージャは SQL からコールできるようになります。assignEMailAddress は値を返さないため、次のように CREATE PROCEDURE コマンドを使用します。

```
CREATE OR REPLACE PROCEDURE
   ASSIGN_EMAIL(E_NO INT, F_NAME VARCHAR2, L_NAME VARCHAR2)
   AS LANGUAGE JAVA NAME 'EMAIL.assignEMailAddress(java.sql.Connection,
int, java.lang.String,
     java.lang.String)';
/
```

MSQL を使用する場合は、CREATE PROCEDURE 文に続いてスラッシュを入力する必要があります。

A.1.6 データベースへの値の移入

T_EMP に行を挿入します。

```
INSERT INTO T_EMP VALUES(100,'John','E','Smith',null);
```

A.1.7 プロシージャの実行

プロシージャを実行するには、次のように入力します。

```
SELECT ASSIGN_EMAIL(100,'John','Smith')
  FROM dual
```

A.1.8 電子メール・アドレスの検証

ASSIGN_EMAIL プロシージャの結果を表示するには、次のように入力します。

```
SELECT * FROM T_EMP;
```

このコマンドにより、次の出力が生成されます。

```
ENO  FNAME                M LNAME                EMAIL
---- -------------------  - -------------------- --------
100  John                 E Smith                jsmith
```

A.2 トリガーの作成

T_EMP に行が挿入されるたびに ASSIGN_EMAIL が実行されるようにするには、T_EMP に AFTER INSERT トリガーを作成します。このトリガーは次のように作成します。

```
CREATE TRIGGER EMP_TRIGG AFTER INSERT ON T_EMP FOR EACH ROW
  ASSIGN_EMAIL(eno,fname,lname);
  .
/
```

MSQL では、CREATE TRIGGER 文の後にピリオドとスラッシュを 1 つずつ別々の行に入力する必要があります。

T_EMP に 1 行挿入されるたびに、EMP_TRIGG というトリガーが起動されます。このプロシージャの実際の引数は、列 eno、fname および lname の値です。

connection 引数を指定する必要はありません。

A.2.1 トリガーのテスト

T_EMP に 1 行挿入して、トリガーをテストします。

```
INSERT INTO T_EMP VALUES(200,'James','A','Smith',null);
```

A.2.2 電子メール・アドレスの検証

SELECT 文でトリガーの起動を確認します。

```
SELECT * FROM T_EMP;
   ENO FNAME                M LNAME                EMAIL
   --- -------------------- - -------------------- --------
   100 John                 E Smith                jsmith
   200 James                A Smith                jasmith
```

A.3 コミットまたはロールバック

最後に、変更をコミットして作業を保存するか、ロールバックして変更を取り消します。

B

JDBC 2.0 の新機能

この付録では、JDBC 2.0 の新機能について説明します。

B.1 インタフェース接続

B.1.1 メソッド

Statement

createStatement(int resultSetType, int resultSetConcurrency)

指定された型と並行性の ResultSet オブジェクトを生成する Statement オブジェクトを作成します。

Map

getTypeMap()

この接続に対応付けられた型マップ・オブジェクトを取得します。

CallableStatement

prepareCall(String sql, int resultSetType, int resultSetConcurrency)

指定された型と並行性の ResultSet オブジェクトを生成する CallableStatement オブジェクトを作成します。

PreparedStatement

prepareStatement(String sql, int resultSetType, int resultSetConcurrency)

指定された型と並行性の ResultSet オブジェクトを生成する PreparedStatement オブジェクトを作成します。

void

setTypeMap(Map map)

指定された型を、この接続に対する型マップとしてインストールします。

B.2 インタフェース文

Connection

getConnection()

この Statement オブジェクトを生成した Connection オブジェクトを返します。

int

getFetchDirection()

この Statement オブジェクトから生成される結果セットについて、データベース表から行をフェッチするデフォルトの方向を取り出します。現在サポートされているのは、FETCH_FORWARD のみです。

int

getFetchSize()

この Statement オブジェクトから生成される結果セットについて、デフォルトのフェッチ・サイズである結果セット行数を取り出します。現在サポートされているフェッチ・サイズは 1 のみです。

int

getResultSetConcurrency()

結果セットの並行性を取り出します。現在サポートされているのは、CONCUR_READ_ONLY のみです。

int

getResultSetType()

結果セットの型を判断します。現在サポートされているのは、TYPE_FORWARD_ONLY と TYPE_SCROLL_INSENSITIVE のみです。

void

setFetchDirection(int direction)

結果セット行の処理方向についてのヒントをドライバに提供します。

void

setFetchSize(int rows)

より多くの行が必要なときにデータベースからフェッチする行数についてのヒントを JDBC ドライバに提供します。

B.3 インタフェース ResultSet

B.3.1 フィールド

static int
CONCUR_READ_ONLY

更新できない ResultSet オブジェクトの並行性モード。

static int
CONCUR_UPDATABLE

更新できる ResultSet オブジェクトの並行性モード。現在サポートされていません。

static int
FETCH_FORWARD

結果セット内の行が、順方向（先頭から最後）で処理されます。

static int
FETCH_REVERSE

結果セット内の行が、逆方向（最後から先頭）で処理されます。現在サポートされていません。

static int
FETCH_UNKNOWN

結果セット内の行の処理順序は不明です。

static int
TYPE_FORWARD_ONLY

カーソルが前方にのみ移動する ResultSet オブジェクトの型。

static int
TYPE_SCROLL_INSENSITIVE

スクロール可能だが、一般に他からの変更は反映されない ResultSet オブジェクトの型。

static int
TYPE_SCROLL_SENSITIVE

スクロール可能で、一般に他からの変更が反映される ResultSet オブジェクトの型。現在サポートされていません。

B.3.2 メソッド

boolean
absolute(int row)

結果セット内の指定された行番号へカーソルを移動します。

void
afterLast()

結果セット内の最後尾（最後の行の直後）へカーソルを移動します。

void
beforeFirst()

結果セット内の先頭（最初の行の直前）へカーソルを移動します。

boolean
first()

結果セット内の最初の行へカーソルを移動します。

Array
getArray(String colName)

この ResultSet オブジェクトのカレント行の SQL ARRAY 値を取得します。

BigDecimal
getBigDecimal(int columnIndex)

カレント行の列の値を、完全な精度の java.math.BigDecimal オブジェクトとして取得します。

BigDecimal
getBigDecimal(String columnName)

カレント行の列の値を、完全な精度の java.math.BigDecimal オブジェクトとして取得します。

int
getConcurrency()

この結果セットの並行性モードを返します。

Date
getDate(int columnIndex, Calendar cal)

カレント行の列の値を、java.sql.Date オブジェクトとして取得します。

int
getFetchDirection()

この結果セットのフェッチ方向を返します。

int
getFetchSize()

この結果セットのフェッチ・サイズを返します。

int
getRow()

カレント行の番号を返します。

Statement
getStatement()

この ResultSet オブジェクトを生成した Statement オブジェクトを返します。

int
getType()

この結果セットの型を返します。

boolean
isAfterLast()

boolean
isBeforeFirst()

boolean
isFirst()

boolean
isLast()

boolean
last()

結果セット内の最後の行へカーソルを移動します。

boolean
previous()

結果セット内で前の行へカーソルを移動します。

void
refreshRow()

カレント行を、データベース内の最新の値でリフレッシュします。現在は何もしません。

boolean
relative(int rows)

カーソルを、前後どちらかの方向へ相対的な行数分移動します。

B.3.2.1 FALSE を返すメソッド

このリリースでは削除、挿入または更新をサポートしていないため、次の 3 つのメソッドは常に FALSE を返します。

boolean
rowDeleted()

行が削除されているかどうかを示します。

boolean
rowInserted()

カレント行に挿入があったかどうかを示します。

boolean
rowUpdated()

カレント行が更新されたかどうかを示します。

void
setFetchDirection(int direction)

この結果セット内の行の処理方向についてのヒントを提供します。

void
setFetchSize(int rows)

この結果セットに対してより多くの行が必要なときに、データベースからフェッチされる行数についてのヒントを JDBC ドライバに提供します。

B.4 インタフェース DatabaseMetaData

B.4.1 メソッド

Connection
getConnection()

このメタデータ・オブジェクトを生成した接続を取り出します。

boolean
supportsResultSetConcurrency(int type, int concurrency)

指定された結果セットの型とともに並行性の型をサポートします。

boolean
supportsResultSetType(int type)

指定された結果セットの型をサポートします。

B.4.1.1 FALSE を返すメソッド
このリリースでは削除、挿入または更新をサポートしていないため、次のメソッドは常に FALSE を返します。

boolean
deletesAreDetected(int type)

参照できる行の削除を、ResultSet.rowDeleted() をコールして検出できるかどうかを示します。

boolean

insertsAreDetected(int type)

参照できる行の挿入を、ResultSet.rowInserted() をコールして検出できるかどうかを示します。

boolean

othersDeletesAreVisible(int type)

他からの削除を参照できるかどうかを示します。

boolean

othersInsertsAreVisible(int type)

他からの挿入を参照できるかどうかを示します。

boolean

othersUpdatesAreVisible(int type)

他からの更新を参照できるかどうかを示します。

boolean

ownDeletesAreVisible(int type)

結果セット自身による削除を参照できるかどうかを示します。

boolean

ownInsertsAreVisible(int type)

結果セット自身による挿入を参照できるかどうかを示します。

boolean

ownUpdatesAreVisible(int type)

結果セット自身による更新を参照できるかどうかを示します。

boolean

updatesAreDetected(int type)

参照できる行の更新を、メソッド ResultSet.rowUpdated() をコールして検出できるかどうかを示します。

B.5 インタフェース ResultSetMetaData

B.5.1 メソッド

String

getColumnClassName(int column)

列の値を取り出すためにメソッド ResultSet.getObject がコールされた場合に、インスタンスが生成されている Java クラスの完全修飾名を返します。

B.6 インタフェース PreparedStatement

B.6.1 メソッド

Result

SetMetaDatagetMetaData()

ResultSet の列の数、型およびプロパティを取得します。

void

setDate(int parameterIndex, Date x, Calendar cal)

指定されたパラメータを、指定された Calendar オブジェクトを使用して java.sql.Date 値に設定します。

void

setTime(int parameterIndex, Time x, Calendar cal)

指定されたパラメータを、指定された Calendar オブジェクトを使用して java.sql.Time 値に設定します。

void

setTimestamp(int parameterIndex, Timestamp x, Calendar cal)

指定されたパラメータを、指定された Calendar オブジェクトを使用して java.sql.Timestamp 値に設定します。

C

サンプル・プログラム

この付録では、Oracle Lite に同梱された Java サンプル・プログラムの使用手順を説明します。説明する内容は、次のとおりです。

C.1 Java サンプル・プログラムの概要

Oracle_Home¥Mobile¥SDK¥Examples¥Java ディレクトリには、Java ストアド・プロシージャ、Java レプリケーション・クラスおよび JDBC を Oracle Lite で使用する方法を示すサンプル・プログラムが含まれています。

Java のサンプル用ディレクトリには、次のファイルが含まれています。

1. **Stoproex.sql**
2. **INVENTORY.java**
3. **JDBCEX.java**
4. **plsqlex.sql**
5. **PLSQLEX.java**

次の項ではサンプルについて説明します。Java のクラス、メソッドおよびファイルの名前は、大 / 小文字が区別されます。SQL から Java プログラムを実行するときは、大 / 小文字をそのまま保持するために名前は二重引用符で囲む必要があります。

C.1.1 JDBC のサンプル

ファイル **JDBCEX.java** には、JDBC クラスを使用して PRODUCT 表の行を選択し情報を表示する Java プログラムのサンプルが含まれています。

C.1.2 PL/SQL から Java サンプルへの変換

Oracle の PL/SQL 言語で作成されたストアド・プロシージャとトリガーは Java に変換できます。**PLSQLEX.java** に含まれている Java プログラムのいくつかは、『PL/SQL ユーザーズ・ガイドおよびリファレンス』で説明されている PL/SQL プログラムと対応しています。**Plsqlex.sql** には、Java ストアド・プロシージャを起動する SQL 文が含まれています。

C.1.3 Java ストアド・プロシージャのサンプル

Java ストアド・プロシージャのサンプルは、Oracle Lite の表にクラスを手動でアタッチする方法を示します。このかわりに、`loadjava` を使用してクラスを Oracle Lite データベースにロードし、CREATE PROCEDURE 文または CREATE FUNCTION 文を使用してそのクラスのメソッドを SQL にパブリッシュすることもできます。このモデルでは、クラスはデータベース表にはアタッチしません。ストアド・プロシージャを開発するパブリッシュ・モデルの説明は、第 2 章「Java ストアド・プロシージャとトリガー」の「モデル 1: ロード・パブリッシュ・ストアド・プロシージャ開発モデルの使用」を参照してください。

ファイル **Stoproex.sql** には、サンプル・スキーマを作成する SQL 文が含まれています。このスクリプトは、Java サンプルを実行する前に MSQL を使用して実行する必要があります。サンプル・スキーマには、次の 3 つの表が含まれています。

表	説明
PRODUCT	製品に関する情報を格納します。
PRODUCT_COMPOSITION	製品の構成に関する情報を格納します。表の各行は、その製品の構成に必要な部品の数量を追跡します。
INVENTORY	倉庫にある製品の数量を格納します。

Stoproex.sql には、表に行を挿入する文、INVENTORY 表に Java クラスをアタッチする文および INVENTORY 表の QTY 列に AFTER UPDATE トリガーを作成する文も含まれています。

INVENTORY 表にアタッチされる Java クラスは、**INVENTORY.java** ファイルで定義されます。このクラスには、SHIP_PRODUCT という静的メソッドが 1 つと、SHIP および CHECK_INVENTORY という非静的（インスタンス）メソッドが 2 つ含まれています。

SHIP_PRODUCT メソッドは引数を 3 つ取ります。Connection オブジェクト、製品 ID および顧客に出荷される製品の数です。

Stoproex.sql は、次の SQL 文を使用してこのメソッドをコールします。

```
SELECT inventory.ship_product(100,1) FROM DUAL FOR UPDATE;
```

次の点に注意してください。

1. 静的メソッドは、*table_name.method_name* として参照する必要があります。静的メソッドを実行するための FROM 句は、常に疑似表 DUAL を参照する必要があります。
2. SQL は inventory.ship_product を大文字に変換します。これは、**INVENTORY.java** 内のメソッド名が SHIP_PRODUCT のためです。表 Inventory とメソッド shipProduct を指定する場合は、両方の名前を "Inventory"."shipProduct" のように二重引用符で囲みます。
3. Connection オブジェクトは、メソッドへの引数として明示的には指定されません。型が java.sql.Connection の引数には Oracle Lite がカレントの接続を提供します。

Java メソッド SHIP では、JDBC クラスを使用して Oracle Lite データベースにアクセスします。引数として渡される接続から文を作成し、SELECT 文を実行します。SELECT 文は、**INVENTORY.java** にも定義されている Java 非静的メソッド SHIP を実行します。

メソッド SHIP は、出荷する製品数を更新します。SHIP が非静的メソッドであるため、Oracle Lite はこのメソッドをコールする前に INVENTORY クラスのインスタンスを作成します。ATTACH 文の WITH CONSTRUCTOR ARGS 句に指定されている列を取るコンストラクタを使用して、インスタンスを作成します。

このサンプルでは、INVENTORY 表の QTY 列に対する AFTER UPDATE トリガーが作成されているため、UPDATE のたびに CHECK_INVENTORY メソッドが実行されます。CHECK_INVENTORY は非静的メソッドであるため、Oracle Lite では行インスタンスを使用するか、（行インスタンスがない場合は）新規インスタンスを作成します。

更新された在庫数が在庫のしきい値を下回った場合は、CHECK_INVENTORY メソッドが PRODUCT_COMPOSITION 表を使用して製品の構成部品を参照します。また、各部品の数を更新して、在庫の補充に必要な製品数に見合うように部品数を更新します。この更新は、最終的な数に到達するまで再帰的に発生します。到達した時点で、CHECK_INVENTORY により製品の注文が入れられます。

C.2 サンプルの実行

Java サンプルを実行するには、次の手順に従います。

1. サンプル・ディレクトリ *Oracle_Home*¥Mobile¥SDK¥Examples¥JAVA に移動します。例を次に示します。

   ```
   cd ¥ORACLE_HOME¥MOBILE¥SDK¥EXAMPLES¥JAVA
   ```

2. 「.」（カレント・ディレクトリ）が CLASSPATH に含まれていない場合は、追加します。

   ```
   set CLASSPATH=.;%CLASSPATH%
   ```

3. MSQL を使用して SQL スクリプトを実行します。例を次に示します。

   ```
   msql system/mgr@ODBC:polite @stoproex.sql
   ```

C.2.1 JDBC のサンプルの実行

JDBC のサンプルを使用するには、**Stoproex.sql** スクリプトを実行して Oracle Lite データベースに PRODUCT 表をインストールします。

```
msql system/mgr@ODBC:polite @stoproex.sql
```

次のコマンドを使用してソース・ファイルをコンパイルします。

```
javac JDBCEX.java
```

コンパイルされたクラスを次のように実行します。

```
java JDBCEX
```

C.2.2 PL/SQL 変換のサンプルの実行

PLSQLEX.java を実行するには、MSQL を起動します。

```
msql system/mgr@odbc:polite
```

MSQL のプロンプトで次のスクリプトを実行します。

```
@plsqlex.sql
```

Java ソース・ファイル **PLSQLEX.java** を表にアタッチします。

```
alter table temp attach java source "PLSQLEX" in '.';
```

表のメソッドを実行するには、次のように入力します。

```
select temp."sampleOne"() from dual for update;
```

結果を表示するには、次のように指定します。

```
select * from temp;
```

その他のサンプルの詳細は、**PLSQLEX.java** を参照してください。サンプルには、`sampleOne` から `sampleFour` という名前が付けられています。

C.2.3 Java ストアド・プロシージャのサンプルの実行

Stoproex.sql スクリプトを実行し、ストアド・プロシージャのサンプルに必要な表とストアド・プロシージャをインストールします。

```
msql system/mgr@ODBC:polite @stoproex.sql
select inventory.ship_product(p,q) from dual;
```

スクリプトが完了すると、在庫表の内容が表示されます。MSQL のプロンプトで次のように入力します。

```
select * from inventory;

PID   QTY THRESHOLD
---- ---- ---------
100     1     1
101    -6     2
102   -26     8
103   -26     8
```

表の中の負の数値は、部品 101、102、103 に補充が必要であることを示します。

索引

L

M

O

P

R

S

T

V

W

Z

あ

か

き

く